

日 本 体 育 学 会

体育心理学専門分科会会報

第12号 (通卷第40号)

体育心理学専門分科会

2000年8月発行

日本体育学会体育心理学分科会会則

- 第1条 本会は日本体育学会 体育心理学専門分科会と称する。
- 第2条 本会は体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は第2条の目的を達成するために次の事業を行う。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報の収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は本会の趣旨に賛同する者で、本会の会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 運営委員 若干名
- 第6条 本会の会長の任期は2年を原則とする。ただし、運営委員は留任を妨げない。
- 第7条 本会の会議は総会と運営委員会とする。
- 第8条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 会長および運営委員の選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第9条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第10条 会長は運営委員の投票により互選する。会長候補者が過半数に満たない場合は、出席会員の3分の2以上の賛成によって決定される。
- 第11条 会務の執行は、運営委員と協議のうえ事務局が担当する。
- 第12条 本会の経費は会員の会費（年額1000円）、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第13条 本会の会計年度は日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門分科会総会までとする。
- 第14条 本会の事務は事務局で行い、当分の間、筑波大学体育科学系内（〒305-8574 茨城県つくば市天王台1-1-1, TEL&FAX:0298-53-2686）に置く。事務局には幹事（若干名）を置き、任期は4年間とする。

平成7年10月5日施行。

体育心理学専門分科会選出の日本体育学会の役員

任 期：平成11年4月1日～平成13年3月31日

理 事：3名

杉原 隆 猪俣公宏 徳永 幹雄 （順不同）

評議委員：22名

阿江 美恵子	落合 優	竹中 晃二	藤田 厚
荒木 雅信	加賀 秀夫	調枝 孝治	山本 勝昭
石井 源信	海野 孝	徳永 幹雄	吉田 茂
伊藤 政展	工藤 孝幾	中込 四郎	吉本 俊明
市村 操一	近藤 充夫	橋本 公雄	(五十音順, 敬称略)
猪俣 公宏	杉原 隆	船越 正康	

なお、上記評議員の先生には、体育心理学専門分科会の運営委員として同期間活動して頂くことになって
います。

はじめに

日本体育学会体育心理学専門分科会
事務局代表 中込四郎（筑波大学）

第47回体育学会（千葉大学）後，九州大学より専門分科会事務局を筑波大学がバトンタッチし，「次のオリンピック開催の年まで」と，4年が経過いたしました。その間，学会大会の分科会関連の行事を計画したり，学会本部との対応を行ってまいりました。また，この会報づくりも仕事の一つでした。

昨年の50回記念大会（東京大学）に象徴されるように，マンモス化した日本体育学会は，大きな転換期を迎えているようです。しばらく，試行錯誤の時期が続く必要があるように思われます。どちらかというところ，学会大会は体育・スポーツ学の統合を，そして分科会活動は分化を指向するイメージを持ってまいりました。昨年は，イブニングシンポジウム・レクチャーといった形態で私どもの分科会でもいくつかの研究グループが中心になり，活発な討議の場をもつことができました。これらが，学会大会とは別に主体的な研修機会としてさらに発展していくことが望まれます。年に1度の学会大会では，これらの研究グループが成果をもちより，同じ土俵で討議できるとさらに良いように思われます。

この4年間，前事務局の遺産を食いつぶしたような部分もありましたが，会員の協力を得ながら大過なく分科会事務局としての責を果たすことができました。感謝申し上げます。次期の事務局の活動に対して，事務局経験者としての立場からも協力できることを願っております。会員の皆さまにもこれまで以上にサポートいただけますようお願い申し上げます。

平成12年8月

はじめに

日本体育学会体育心理学専門分科会
事務局代表 中込四郎（筑波大学）

第47回体育学会（千葉大学）後，九州大学より専門分科会事務局を筑波大学がバトンタッチし，「次のオリンピック開催の年まで」と，4年が経過いたしました。その間，学会大会の分科会関連の行事を計画したり，学会本部との対応を行ってまいりました。また，この会報づくりも仕事の一つでした。

昨年の50回記念大会（東京大学）に象徴されるように，マンモス化した日本体育学会は，大きな転換期を迎えているようです。しばらく，試行錯誤の時期が続く必要があるように思われます。どちらかというところ，学会大会は体育・スポーツ学の統合を，そして分科会活動は分化を指向するイメージを持ってまいりました。昨年は，イブニングシンポジウム・レクチャーといった形態で私どもの分科会でもいくつかの研究グループが中心になり，活発な討議の場をもつことができました。これらが，学会大会とは別に主体的な研修機会としてさらに発展していくことが望まれます。年に1度の学会大会では，これらの研究グループが成果をもちより，同じ土俵で討議できるとさらに良いように思われます。

この4年間，前事務局の遺産を食いつぶしたような部分もありましたが，会員の協力を得ながら大過なく分科会事務局としての責を果たすことができました。感謝申し上げます。次期の事務局の活動に対して，事務局経験者としての立場からも協力できることを願っております。会員の皆さまにもこれまで以上にサポートいただけますようお願い申し上げます。

平成12年8月

目 次

はじめに	中込 四郎 (筑波大学)	i
目次		iii
I. 特別寄稿		
「体育心理学研究以前の話」	調枝 孝治 (広島大学総合科学部)	1
「長距離走者の走行ペース制御における認知的方略」	高井 和夫 (筑波大学準研)	6
II. 研究室の紹介		
1. 研究室めぐり (その7)		11
1) 東京学芸大学		11
2) 日本体育大学		13
III. 日本体育学会第50回記念大会関連		
1. 特別講演		15
テーマ: 「からだの自由と不自由」		
演 者: 長崎 浩 (東北文化学園大学)		
司会・報告: 荒木 雅信 (大阪体育大学)		
<特別講演傍聴記>		
特別講演傍聴記	木島 章文 (筑波大学体育科学研究科)	19
2. 一般研究発表 (座長報告・ポスター発表報告)		21
<口頭発表・座長報告>		21
丹羽 劭昭 (聖母被昇天学院女子短期大学) 調枝 孝治 (広島大学)		
遠藤 俊郎 (山梨大学) 杉山 佳生 (鹿屋体育大学) 吉田 茂 (筑波大学)		
伊達 萬里子 (武庫川女子大学) 平井 タカネ (奈良女子大学)		
中込 四郎 (筑波大学)		
<ポスター発表傍聴記>		32
平田 智秋 (十文字学園女子短期大学) 蓑内 豊 (北星学園大学)		
西野 明 (大阪体育大学) 磯貝 浩久 (九州工業大学)		
大場 ゆかり (九州大学大学院)		
<イブニング・シンポジウム報告>		41
「スポーツ社会心理学研究会」	伊藤 豊彦 (島根大学)	41
「スポーツ動作法研究会」	星野 公夫 (順天堂大学)	42
「臨床スポーツ心理学研究会」	土屋 裕睦 (大阪体育大学)	43
「メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会」	高妻 容一 (近畿大学)	45

<日本体育学会参加記>	46
日本体育学会第50回記念大会に参加して	荒井 弘和（早稲田大学大学院） 46
日本体育学会第50回記念大会に参加して	田島 誠（広島大学大学院） 47
日本体育学会第50回記念大会に参加して	岡 浩一郎（早稲田大学） 48
IV. 日本体育学会第51回大会（奈良女子大学）の案内	
1. 総会	
2. キーノートレクチャー.....	51
日時：10月9日	
会場：記念館	
テーマ：「運動制御の階層秩序」	
司会：関矢 寛史（広島大学）	
演者：調枝 孝治（広島大学）	
3. 一般口頭発表・ポスター発表	
V. 事務局報告	
総会式次第	53
1. 事業報告	54
1) 日本体育学会体育心理学分科会関連	54
2) 体育心理学専門分科会会報の発行	54
3) その他事務局業務報告	55
4) 速報	56
2. 第50回記念大会総会関係（議題）.....	55
3. 速報	56
4. 平成11年度決算および平成12年度予算案について	57
編集後記	

1. 特別寄稿

<特別寄稿>

「体育心理学研究以前の話」

広島大学総合科学部 調枝孝治

1) 長い間役立たずな研究ばかりですみません

私は今年いっぱい定年です。それで、事務局から硬い研究の話は、キーノートレクチャーで、軟らかい話は会報で、「最後ですから自由に何でもお書きください」というありがたいお言葉をいただきました。しかし、この自由さは、体育関係の雑誌編集者から「子どもの生きる力を育てる体育」とか「21世紀の体育・スポーツ」といった、どこから手をつけたらよいか困惑するタイトルをいただいた時に抱く、ある種の不自由さに近いものです。何でも書いてよい自由とは、何でも書いてよい「権利」を意味しますが、それを自在に書ける「資格」があるかと悩むものです。まあそんなに文句をいわずに何でも書いて、定年後は自由自在に余生を送りなさいとの励しと感謝し筆をとります。

私が体育学会の体育心理学分野で初めて発表させていただいたのは、1966年の第16回大会（北海道大学）です。以来、本年の51回大会まで、毎回無遅刻無欠勤（発表時間オーバの常習者）で発表し、皆様には大変お世話になりました。来年の52回大会は振り出しにもどり北海道大学です。私の発表は、聞かれた方の多くが、「どうして、あのような研究が、体育心理学と関係があるのか」と思われたと思います。ここで深く反省すると共に、キーノートレクチャーでの自己紹介の時間が

もったいないので、はずかしながら、変な体育心理学？の研究生活35年間を駆け足でお話したいと思います。特に、若い研究者の方への参考になれば幸いです。

2) 応用科学としての体育心理学

皆さん「体育心理学」は何を教育・研究する分野なのでしょう。多くの人は、この種の質問を年寄りから受けた経験があると思います。現在の若い学生なら、「それは体育の先生になる人が必要な教職科目ですが、同じような内容の教育心理学という教職科目もあります。しかし、先生にはなれないし、忙しいのに、どうにかなりませんかね」と言うでしょう。そうなんです、体育心理学は教育心理学の体育への応用から出発したのです。つまり、体育の教授・学習過程で生じる諸問題に教育心理学の原理や方法を適用する分野なのです。教育心理学はというと、教育全般の諸問題に心理学の原理や方法を適用する分野・・・と続くのです。

私が広島大学に入ったのは1958年です。小・中・高校と運動・スポーツに明け暮れて、大学では体系的な理論と実践を期待して入学しました。しかし、多くの教授から「体育学」の体系化はこれからだから、君たち頑張るのだよと期待されました。当時、国立大学で体育学部があったのは東京教育大だけでした。そして、そこを卒業した人

たちの多くが、各地の大学の教育学部や教養部に配属されました。体育は教育学部の教科教育の一分野としての体育と教養部の一般体育科目でした。そのため、体育のカリキュラムは、医学、哲学、教育学、心理学、統計学などの専門分野からの知見や方法を体育分野へ適用したもので構成されていました。それは、当時の体育学部でさえ教員養成(応用的)色彩が強い講義内容でした。そういう観点からいえば、私たちの世代は、最初に基礎学問をしないで、のっけから応用学問をしてきた変則学生だったのです。

それでも、最初は応用科学としての体育に興味をもちましたが、少し深く探求するといつも文献は、親学問の分野のものでした。それは、体育学の歴史が浅いためと観念しましたが、他方ではどうして応用ばかりで体育学独自の基礎学問がないのかと考えていました。反面、基礎学問の文献を通して、理論や方法の数々を目にすることができ多領域の動向を知り得たことは幸いでした。現在の約40歳以下の体育学の研究者から、体育学の体系が広範囲で自分の領域だけ理解するのも大変ですという声を聞きます。それはそれとして結構な話ですが、応用科学としての体育学に必要な多領域への興味・関心の希薄さや研究上の発想の貧困さが問題となってきつつあります。

3) 親学問としての心理学

そうこうするうちに学部卒業となりましたが、体育心理学の教授から親学問の大学院への進学を勧められ、教育学部の学習心理学の講座に入りました。学習心理学の教授は、わが国では学習の数理モデルによる研究の先駆者であり、日本人間工学会の会長をされていました。数学嫌いの多い心理

学の世界では特異な教授でした。私の数学嫌いを見抜かれた教授は、「私はあと一年で退官すが、とにかく体育学の基礎はスキルの研究です。君はスキルの研究で体育学に貢献をしなさい」と言われ、皆様よくご存知の *Perceptual and Motor Skills* という雑誌を購入していただきました。しかし、「心理学教室の図書室にある心理学の本は読まないように！。図書の事務官にも調枝君には本を貸し出さないよう言っているから」という困った御下命でした。心理学の本を読むなという御下命の裏には、「そっと隠れて読みなさい」ということと勝手に解釈し、ヴェテラン事務官の厚意でいろいろな心理学の世界を覗かせていただきました。

それからは、一週間に一度、自分で考えたことを教授に報告に行きました。それは、明けても暮れてもスキルの概念、性質、モデルなどの詳細な理解を要求されました。さらに、私が早く実験をしたいと申し出ると、そんなにしたいのなら、まず実際の現場で何が起きているかを理解するために、教養部の先生のサッカーのゲーム分析を手伝いなさいということになりました。問題はその日のゲーム分析のデータ整理をし、翌朝教授の前で説明するという忙しさでした。ところが、その説明の結果は散々で、経験的に発見された関係は、その背後にある基礎的なメカニズムを説明しないもので、既成のスキルの概念の分析に終始して、その機能的側面を閑却していました。それを、約半年間ほど継続した時点で、教授から「良い理論ほど実践的なものはない。実験をする前に相当な見当をつけたことを検討するのなら許すが、現状では無理。事実を見てもそこから理論を構成する頭がなければそれは生きてこない。この意味で事

実に即した理論的思索は、科学の最も大切な方法である」と一蹴されました。

そんなこと言われても修士論文の実験がせまっていた。そこで、情報理論の観点から次のような研究計画を考えました。運動スキルの習得過程には、情報処理過程が存在し、そこでの情報で対象を制御することが重要である。人間の運動制御は、ある目的を達成するために、エネルギーの消費だけでなく、情報や制御の処理も伴う。このことにより、運動行動が組織化する。また、運動スキルは、その完成と考えられている、ある全体的成就に向かって動く系列を形成しているものと考えれば、異なった運動要素間の協応や組織化が重要な研究課題となる。そこで、運動スキルの課題で最も複雑なスキルは、タイミング・コントロール（適時性）だということで、小学生を用いて移動指標に対してバレーボールを投げて一致させる、一致タイミングスキルの学習実験の許可を受けに行きました。すると、「考え方は大体よろしい。その考えた内容を具体的な装置として再現しなさい」ということでした。

やれやれこれは大変なことになったというのが本音でした。当時の心理学教室には、竹井機器工業製の「見越し反応装置」のカタログがありました。しかし、その装置では、上記のような考えを検証することは無理でした。そこで、実際のボールゲームで発現する基本的スキルとしての、ボールを（つかむー投げる）という動作の結合過程やタイミング・コントロールのスキルの習得過程を分析するための大掛かりな実験装置を作りました。

このときに気づいた点は次のとおりです。研究では既存の理論を修正していくため、少しでも新しい考えが生まれれば、それを検証するための方法

も修正しなければならないという点です。その点を推し進めれば、研究仮説が十分でないのに既製品の装置に安易に手を出したり、その装置や方法に合うように仮説を立てたりする愚を冒さないことが重要です。また、しばしば同じかあるいは他領域の先端的な研究者に、その人の方法や装置のみを指導してもらっても、一向に研究が進まない人に出くわします。この人は、方法や装置は何かを検証するために工夫されているので、その工夫された何かの内容が理解できないと、その方法や装置は「猫に小判」となりかねない点に気づいていない人です。確かに科学は、その成果の完全性に注意が向きますが、そのような成果を産出できる方法の合理性に絶大な信頼性を置いています。さらに、客観的な方法は、科学的成果の再現性が保証されているため、誰にも理解されやすいので注意が向き易いことも良くわかります。

現在のようにコンピュータ全盛の時代では、一昔よりも、より研究の発想を方法的に再現することが容易になっている面はありますが、朝から晩までコンピュータの前にへばりついている皆さんはどう思われますか。

4) 研究組織が弱いと自分の専門が変化します

そんなわけで、何とか実験を終え修士の論文を書くことができました。それにしても、この2年間の研究トレーニングが私の将来を決定づけたと思います。体育心理学の応用と基礎で悩んでいた学部生の頃と比較して、両者の重要性が幾分かは明瞭になりつつありました。

例えば、(1) 科学は事象の構造やその機能をありのままに把握し、この過程や条件を分析することによって、その事象の基底に存在する原理法則を見つけることである。それと同時にその原理法

則を同様な事例に適用して、事象に望ましい変更を加えかつ新しい事象を創造すること。そして、科学的方法としては前者を観察（調査）と呼び、後者を実験（発明）と呼ぶということ。（2）実験場面は現実との量的一致を求めるものではなく現実の主要な本質的構造を「移調」（移調とは、本質的な構造的特長を変えないで、そのまま残して変容すること）したものであり、したがって実験場面が単純で常識的であっても事象の本質的認識にとっては極めて重要なこと。

（3）心理学の基礎を特徴づけている実験心理学は、感覚、知覚、注意、学習、動機、個人差などを対象にしているが、これらの知見が即応用場面ですぐに役に立つことを確約することはできない場合が多い。応用場面は多様で複雑な特殊目的が必ずあり、その目的との関係で、多要因を相互に関係づけたり評価したりしなければ効果が上がらない。そこでは、目的を達成するために分析された基礎的な事実から、望ましい条件を構成するためのシステム思考が要求される。

このような研究者としての心構えは、科学的研究の世界に入って行くにあたっての親学問からのうれしいプレゼントでした。最初の就職先は広島工業大学でした。ここでの2年間は、もっぱら教養課程の体育実技と機械工学の助手の先生から実験装置の作成を教わりました。それこそ研究課題の解明という目的に有効な工学的知識と技術の再編スキルの習得でした。それから、小・中学校の教員養成課程の横浜国立大学へ移り、体育心理学と教養課程の体育実技、それに卒業論文の指導でした。大学院のない教員養成大学の研究費は、こんなに研究費が少ないのかと驚きましたが、今から思えば、応用場面の連続で、過去の教えを忠実に守って最も頭と手足を動かした8年間でした。ま

た、研究室のゼミでは、Hebb(1966)の「行動学入門」を、私が生理学の用語で、生理学の教授が心理学の用語で読書会を行うという貴重な体験をしました。領域の異なる内容を理解したのは良かったのですが、逆に心理学の用語が如何に物質的、生物学的基礎に置かれていない用語であるかをその時に気づきました。そのため、同じ団地に住む機械工学の先生（温熱環境の制御）から、運動制御に興味があるなら「サイバネティックス研究会」に参加したらどうかということで、数年間その会に出席しました。この研究会は情報と制御に関係した研究であれば、来る者は拒まないという学際的な研究会でした。そこでは基礎とか応用とかのレベルではなく、何か新しいことがわかれば、どんな領域だって接触するという真にハイレベルな研究会でした。

学生紛争が収束に向かう中で、広島大学の統合移転に合わせて体育学部の創設構想が浮上しました。私にも手伝いなさいということで日本で初めての総合科学部へ移りました。体育学部の構想案は、横浜国立大学で作りました。本来の意味での体系的な専門学部の構想ということで、当時としては画期的な案だったと自負しています。

なぜなら、文部省、大学の学部構想の意思決定機関から修正を受けなかったのですから。しかし、時の中曽根臨時行革首相が新設学部は凍結するということでダメになりました。しかし、鹿屋体育大学はでき、政治の世界にあきれはてました。統合移転地の体育学部用地は駐車場となりました。皮肉にも6代目の創設準備室長の私が「虎は死して毛皮を残す。体育学部死して駐車場残す。」という迷言で幕引きを完了しました。

その後、総合科学部の理系に属し、教養教育のスポーツ実習、生体行動科学コース（生命科学、心

理学，健康スポーツ科学から構成された組織）で，運動心理学，健康科学実験や演習，それに，大学院の生物圏科学研究科で環境心理学の講義と次第に「体育心理学」から離れていきました。この頃から，運動学習，リズム，舞踊の即興現象などを生命科学，進化学，物理学やシステム工学分野のキーワードで「自習」するようになりました。しかし，そのような雑学は，常に心理学的な機能の解明に適用できるかどうかを念頭に置いて注意深く行っていますが，そんなに簡単ではないことを思い知らされています・・・・・・というように訳で定年なのです。どうか若い人は，研究活動の上で，私と逆の体験をしてください。それは，物質→生物→心理→社会・文化→宇宙の階層を一步ずつ時間をかけて昇ってください。そして，皆さんが選ばれた階層レベルで特殊な貢献をされますようお願いして終わりとします。キーノートレクチャーで，感謝の気持ちを表したいと思いません。

＜学位論文紹介＞

「長距離走者の走行ペース制御における認知的方略」

筑波大学体育科学系（準研）
高井 和夫

持久力の極限に挑むランナーの資質を理解することは、人間の運動能力における未知の可能性の発見につながる好奇心をかきたてる。長距離走は高い運動強度（最大酸素摂取量で80%以上）で長時間走行するため、トレーニングを積んだ長距離走者は、身体的な全身持久性を獲得すると同時に、心理学的にもその持久力を効果的に発揮するための能力が備わってくると考えられる。

この問題については1970年代から主に米国において盛んに研究されてきたが（e.g., Morgan & Pollock, 1977）、その確たる証拠が得られてはこなかった。当時は走行中の苦しさ（マラソン終盤の“壁”）やストレスの対処法に限局された関心が向けられており、身体的な感覚やきつさに注意を向けるか、逸らすかいずれが有効かという対立する立場が主張されてきたが、どちらもケースバイケースで、一貫した結果は得られてこなかった。

ある機会で1950年代に1マイルで4分の壁を破ったR. G. Bannisterの伝記（『The Four-Minute Mile』）を紹介されて拝読したところ、以後の研究の方向性を示唆する大きなヒントを与えてくれた。特に興味を引かれたのは、試合の10日前辺りに400mを60秒で10回繰り返す練習を終えたときに、記録樹立の確信を得たという記述の前後であった。つまり、優れた走者は、将来達成可能な記録（主目標）を立て、その達成に道筋をつける

いくつかの要所となる練習（下位目標）を設定する傾向が見られた。また、こうした練習を積み過程で耐久可能なペースに応じた主観的な運動強度（きつさ）が評価可能になっていた。さらに、それと同時にライバル（Landy, J.）の戦術パターンや長所・短所をも理解するようになった。すなわち、耐久可能なペースで走行する（持久力を発揮する）ためには、将来の結果を的確に見通すこと、また運動強度が許容範囲を越えていないか評価するために内外の状態を把握すること（モニタリング）が肝要であることをBannisterは示唆していた。

さて、このパフォーマンス発揮に関わる認知的要因は、熟練者（Expert）研究で得られてきた知見と類似する特徴ではないか、であるならば熟練によって走者にはいかなる認知的な能力が備わるのか調べてみては、というアドバイスを受けた。なるほど、熟練者は先の状況の予測能力に長けており、また内外の状況（手がかり）をパフォーマンスとうまく関連づける長所があることは広く知られている。ランナーの心理的適性をこうした視点から考察している報告はほとんどなく、この分野の停滞気味の状況のブレークスルーになるかもしれないとの期待をもった。

これまで私自身の中で関連づけて考慮されることはなかった、長距離走者の認知的方略、Bannister

の示唆、そして熟練者研究がここで一つのストーリーとして結びついてきた。そして、「長期間の練習経験を積むに従って、いわゆる熟練者に備わる認知的能力と類似する特徴が備わることで、効果的なペース制御（持久力の発揮）が可能になるのではないか」という問題意識が浮かび上がってきた。

こうしてついに、本研究の主たる目的として、熟練した長距離走者における走行ペース制御に働く有効な認知的要因の解明、そして特定された認知要因群がペース制御に果たす役割、およびその関連性を明らかにすることと定め、一連の研究課題に取り組んでいった。

ここでは、長期間の練習経験を積むことで走者に備わってくる心理的な能力についてその概略を紹介することにする。ここで言う熟練走者とは試合でのパフォーマンス発揮した練習（140km/週以上）を長期（10年前後）にわたって繰り返し、また一定の記録（5000mで15分00秒以内）に達した走者のことを指している。

1. 正確なペース再生能力

長距離走というと持続力や耐久能力が思い浮かぶが、意外にもそれを可能にするには至適ペース水準を意識的に制御する能力が必要であることがわかってきた。つまり、通常の練習で経験する運速の異なるペース水準を正確に再生することができる。これに対して、熟練度の低い者は、走行開始直後の誤差がより大きく、またより遅いペース水準になるほどovershootして誤差が大きくなる傾向が見られた。これはいわゆるオーバーペースに陥るエラー要因と見なされる。以後、制御要因としてこの再生能力に注目し、関連する認知要因を解

き明かしていく。

2. 正確なイメージ（表象化）

まず、熟練走者はこれから発揮するペース水準なり配分を正確にイメージすることができる。予め、発揮すべきペースを心的にイメージしておくことで、より高速で効率的なペース産出が可能になるのである。こうした傾向は歩行や跳躍での制御における発達においても認められる現象である。長い距離の走行においても、先の状況に対してイメージ（表象）する能力が必要であると知らされたのは驚きであった。

3. 内外の状況のモニタリング

次に、熟練走者は走行中の内外の状況を的確にモニターし、耐久可能なペースで走行しているかどうか評価することに利用する傾向がある。特に、走行距離が長くなるほど、四肢の筋感覚に加えて、呼吸のきつさを積極的にモニターする特徴がある。これは運動時間が長くなるほど疲労感の主因が四肢の筋から呼吸の影響が大きくなる現象があり、至適ペース水準の的確な評価のためにこの部位のモニターの重要性が増すと考えられる。また、走行ペースが主観的な運動強度でどの水準であるのか正確に照合することができる。競合する他の走者に対しても同様に、自他のペースの異動を的確にモニターするようになり、耐久可能な水準を越えて走るようなエラーを冒さなくなる。

4. 状況に応じた制御能力

さらに、他の走者と競合する場面においても、自他のペースの異同を正確にモニターして制御することができる。これに対して、熟練度の低い走者は競合者のペースに徐々に接近する傾向があ

り、それがより速い水準である場合、overshootしたエラーが増える。これは、運動強度が高まるほど注意の狭小化 (attentional narrowing) が生じることで、熟練度の低い者ほどモニタリングのエラーが増加するため、制御が困難になると解釈された。その結果として、自他のペース異同の判断能力が未熟な者は、周囲の動向に影響されやすく、追従する傾向にあると言える。

5. 走行プラン

最後に、熟練走者には数ヶ月先の試合に向けて達成可能な記録 (主目標) を立て、またその実現に必要な練習内容 (下位目標) を設定する特徴が認められる。このとき、「この記録を出すには、○の時期に△の距離を□のペースで走っておくことが必要」というように、将来予想される記録から逆登って練習過程での課題を設けるという特徴がある。いわゆる、手段-目的分析 (means-end analysis) を経験的に実行している。これは、試合中のペース配分の決定においても同様に認められる。

以上から当初の問題に対して結論を下すと、熟練した走者に備わる資質とは、綿密な走行プラン、内外の状況のモニタリング、先の状況のイメージ (表象化)、そして正確なペースの制御 (再生) となる。すなわち、練習経験に裏打ちされた走行プランに基づき、実際の走行を的確にイメージすることで高い精度で効率的なエネルギー発揮が可能になる。また、実際の走行ペースが耐久可能な水準か評価するためモニタリングが働き、発揮ペースの微調整が行われる。この認知要因が相互に関連して働き合うことで適応的なペース制御が可能になるのである。

一見すると持久力だけで片づけられてしまいそう

な長距離走者の適性要因ではあるが、その背後に実に巧みな認知的な制御が働いていたことがわかった。裏を返すと、この認知的要因が適切に機能しなかった場合に生じる、例えばレース前半部分のわずかなオーバーペース等といったミスが、取り返しのつかない失敗につながるため、この失敗事態を回避すべく、人的要因を準備することが必要となる。これが熟練走者に備わる認知的な制御方略の一端を表していると言える。

ひとまず学位論文としての節目を終えたわけだが、未解決の問題があることに触れておく。走行の熟練過程において認知的な発達があるとしたら、それに応じて身体的な適応過程が出現するのではないかと予想される。つまり、エネルギー最小で最大のスピードを獲得すべく、心身の働きが一つのリズムを形成する方向に段階的に収束するのではないかと考えている。例えば、呼吸リズムと動作リズムの同期化 (locomotor-respirator coupling) という現象がある。これは文字通り心拍数が脚のピッチと同期化することであり、走効率の向上に貢献すると言われている。また、走効率を高めるフォームとは、スウィングされた踵が振り戻されながら衝撃の少ない着地を行い、支持脚の膝が安定し上下動が少なく、キック時に地面と足底の角度が狭く、素早いキックが行われることと言われる。従って、こうした走効率の向上のために走者の心身の働きが相互に関連し合う現象は必然であり、またその背景には包括的な説明が存在すると思えるのである。この点について、事例的に走者の熟練過程を長期的に縦断調査することによって、ランニングにおけるリズム形成の本質を解明することが期待される。

持久力の極限に挑むランナーが、最小の労力で最大の効果を生むという人的要因における難問を克服するため、心理的・技術的・体力的な面でいかなる適性を備えているのかを追求することは、人間の奥深い可能性あるいはその限界を如実に映し出してくれる。今後もこのテーマについて新たな発見があることを楽しみにしている。

付記：同名の論文題目において平成11年度筑波大学体育科学研究科より博士（体育科学）の学位を授与されました。主査であられる中込四郎博士（筑波大学）ならびに副査の先生方には貴重なアドバイスを温かい励ましを賜りましたことに記して感謝申し上げます。

【参考文献】

- 1) Bannister, R. G. (1989) *The Four-Minute Mile*. New York: Lyon Press.
- 2) Costill, D. L. (1986) *Inside Running: Basics of Sports Physiology*. IN: Benchmark Press. <コストイル, D. L. 小林義雄 (訳) (1988) インサイド・ランニング 同文書院 pp. 165-168 >
- 3) Masters, K. S., & Ogles, B. M. (1998) Associative and dissociative cognitive strategies in exercise and running: 20 years later, what do we know. *The Sport Psychologist* 12: 253-270.
- 4) Morgan, W. P., & Pollock, M. L. (1977)

Psychologic characterization of elite distance runner. *Annals of the New York Academy of Sciences* 301: 382-403.

5) Noakes, T. (1992) *Lore of Running*. 3rd ed. Champaign, IL: Leisure Press.

6) Pennebaker, J. W., & Lightner, J. M. (1980) Competition of internal and external information in an exercise setting. *Journal of Personality and Social Psychology* 39: 165-174.

7) Schomer, H. (1986) Mental strategy and the perception of effort of marathon runner. *International Journal of Sport Psychology* 17: 41-59.

8) Silva, J.M., III., & Appelbaum, M.I. (1989) Association-dissociation patterns of United States Olympic marathon trial contestants. *Cognitive Therapy and Research* 13: 185-192.

9) 進藤宗洋 (1969) マラソンの研究 (第1報) : 平均スピード・所要時間 (対数尺度) グラフによる分析. 福岡大学35周年記念論文集.

10) Suls, J., & Fletcher, B. (1985) The relative efficacy of avoidant and non-avoidant coping strategies: A meta-analysis. *Health Psychology* 4: 249-288.

11) 山地啓司 (1997) ランニングの経済性に影響をおよぼす要因. 日本運動生理学雑誌 4 : 81-98.

II. 研究室の紹介

<研究室めぐり> (その7)

東京学芸大学

杉原 隆

「研究室めぐり」の原稿を書くようにという依頼があり、東京学芸大学の場合は研究組織としても教育組織としても、体育・スポーツ心理学関係の研究室はないのでその旨話をしたところ、公式の組織ではなくてもよいから書くようにということなので、本学で体育心理がどのように位置づいているのかを紹介したいと思う。

本学は教育学部1学部の単科大学（教官数約380）で、保健体育関係を専門とする教官は、健康・スポーツ科学学科という研究組織に所属している。現在、教官数は28名で、全員で専門科目と共通科目（旧一般体育）を担当している。健康・スポーツ科学学科は、体育学研究室、運動学研究室、保健学研究室、生涯スポーツ研究室、保健体育科教育学研究室内の5つの研究室から構成されている。体育心理学を専門とする小生は、体育学研究室に所属しているが、現在体育学研究室に所属しているのは、小生と、体育原論、体育史を専門とする教官の3名にすぎない。

教育組織は教育系と教養系に分けられる。教育系は昨年度までは学校種別に課程が編成されていたが、学生定員の削減にともない今年度から初等教育教員養成課程、中等教育教員養成課程、障害児教育教員養成課程の3課程に再編された。体育を専攻する学生は初等教育教員養成課程40（昨年度までは50）名、中等教育教員養成課程18（昨年度

では中学・高校別で35）名となった。教養系には生涯学習課程の中に生涯スポーツ専攻があり、学生数は40名である。体育心理関係の授業としては、体育・スポーツ心理学概説、運動学習と指導の心理学、コーチングの心理学、体育心理学各論、体育心理学演習、スポーツ行動論実験演習を小生が担当しており、最近では卒業論文を体育心理で書く場合はこれらすべての授業を受講するよう指導している。体育心理で卒論を書く学生は、以前は毎年6～7名、多い年は10名を超えたこともあったが、条件を厳しくしてから3～4名と適正規模になってきている。卒論は学生の興味を尊重してテーマを決めている。学校体育に関するもの、競技スポーツに関するものが半々位である。

大学院修士課程は17の大講座によって構成されている。その中のひとつである保健体育講座は以前は体育学、運動学など複数の講座に細分化されていたが、現在は一本化され学生数は1学年22名である。教員養成大学の大学院ということで、「現代教育実践の課題」と教科教育に関する実践演習が必修科目となっている。また、現職教員の受け入れを重視し、授業は昼夜開講をしている。

体育心理関係の授業は「体育心理学特論」と「体育心理学演習」が半期づつ通年ひとコマのみである。小生が本学に赴任してから17年になるが、これまでに体育心理で17名（外国人留学生4

名を含む)の学生が修士論文を書いた。平均すると毎年1名ということになる。そのうち6名が大学に就職した。

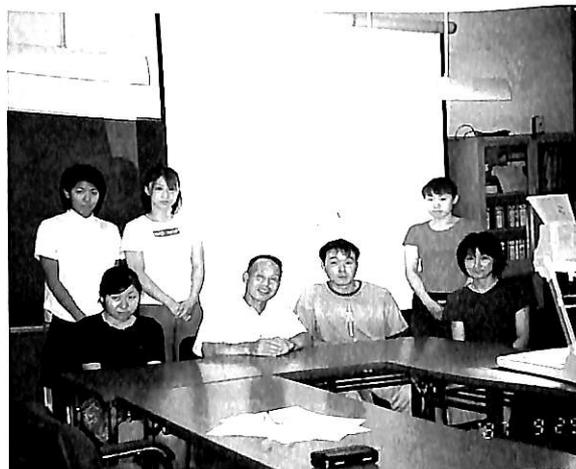
本学の悲願であった大学院博士課程は1996年度に開設された。教員養成系大学に始めて設置された本学を基幹大学とする埼玉大学、千葉大学、横浜国立大学の連合大学院である。正式名称は、「東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科」で、後期3年のみからなる独立研究科であり、広域科学としての教科教育学の研究者養成を主たる目的としている。3つの教育科学講座と6つの教科領域講座の計9講座から構成されており、健康・スポーツ系教育講座は後者に位置づけられている。学生定員は1学年20名であり、9講座あるので平均すれば1講座2名ということになり、保健と体育を含めて4大学で2名ということであるから非常に狭き門である。健康・スポーツ系教育

講座にはこれまで10名の入学者があり、3名の課程博士を出した。小生が主指導教官となった学生は3名いるが、一人は単位を取得して満期退学し、現在は2名となっている。一人は杉山哲司君でスポーツにおける攻撃性、もう一人は渋谷賢君で文脈干渉効果を中心とした運動学習の問題に取り組んでいる。去る4月、小生が主査となり、福島大学の工藤孝幾先生が東京学芸大学大学院連合学校教育学研究科の記念すべき論文博士第1号を取得した。論文題目は、「運動学習における「自己学習方略」に関する研究—「文脈干渉効果」に着目して—」である。

写真を送るようということなので、学部生、院生、ときには卒業生も含めて不定期に行っている体育・スポーツ心理学フォーラムという研究会の様子を写したものを掲載してもらったことにした。



東京学芸大学正門前



体育・スポーツ心理学フォーラムの一時
(前列左2番目が杉原氏)

日本体育大学体育心理研究室

円田 善英

1. 体育・スポーツと心理過程の全体構造の解明をめざして

「体育・スポーツあるいは健康にとって心理学とは何か、また人間の心理にとって体育・スポーツや健康とは何か」を明らかにすることが、体育心理学でありスポーツ心理学であり、そして健康心理学です。こうした領域を対象とした研究が私たちの「体育心理学研究室」です。

周知のように人間をとりまく文化・環境との相互関係のなかで、はじめて人間の心理過程が形成され発達するように、体育・スポーツによって心理過程は形成され発達します。こうした身体活動による心理過程が体育・スポーツの効果的な実践活動を成立させていると考えています。

2. 研究室と授業区分・内容の紹介

研究室は円田善英、西條修光、そして助手の平田大輔の3名により構成されています。

授業の区分は、学部（3年生）、短大（1年生）の講義をはじめ、演習1（実験を含む）、演習2（卒業研究）、専攻科（体育・スポーツ心理学）、そして大学院トレーニング科学系の博士前期課程（スポーツ心理学特論及び特論演習）、後期課程（スポーツ心理学特論及び特論演習）となっています。

授業内容の体育心理学では、主として感覚・知覚、記憶・表象、思考・言語などの認識過程、また注意・集中、感情・意欲、意志、態度・性格な

どの意識過程を体育・スポーツあるいは健康との関連で講義を進めています。そして、それらの心理過程、つまり心理的な機能や能力が体育・スポーツ活動や健康に対する意識と行動の実体どのような役割と効果をもたらすかについての基本的な理解を求めています。

演習1（円田担当）では、わが国の子ども・青年のからだと心をめぐる、何が問題なのかをとらえ、それらの問題構造を分析・検討し問題解明のための課題を明らかにします。また、演習2では「体育・スポーツ心理学の分野で何が問題であり、何を解決しなければならないかを各自が問題を発見・解決する卒業研究に取り組ませる活動により、科学的なものの見方・考え方が身につけるようにしています。

西條演習では、体育やスポーツ場面での心理的関係について実験・研究を行い、発表や論文作成を通して、問題の発見と解決の能力を身につけさせることにしています。また、それらの能力を基礎にスポーツ場面における心理学的な問題について研究をまとめることを卒業研究として、心理科学的な知見や考え方を学ぶことをねらいとしています。特に演習の卒業研究では、毎年、円田・西條ゼミ共に10～25名になっています。

例えば平成11年度の卒業研究を見てみると、西條担当では、18のテーマがあり、それらのテーマを分類すると「不定愁訴と生活の質」、「疲労感と生活の質」、「運動と感情・気分」、「利き

手」，「試合前と心理的状态」，「心理的コンディショニング」，「状況判断力」，「注意力」，「メンタルトレーニング」，「あがり」，「心理的競技能力」，「バーンアウト」に関する研究になっています。

円田担当では，「自律神経機能と心理的ストレス」，「疲労感と心理的ストレス」，「性格特性と心理的ストレス」，「心理的コンディショニン

グと競技成績」，「生活実体と心理的ストレス」，「プレッシャー」，「心理的競技能力」，「イメージトレーニングと言語教示」，「イメージトレーニング」に関する研究の13テーマとなっています。

このように卒業研究（合計31テーマ）は，多種多彩なテーマとなっていますが，概ね，体育心理学，スポーツ心理学，健康心理学の分野になっており，調査法によるものが大勢を占めています。

Ⅲ. 日本体育学会第50回 記念大会関連



東京大学正門前

＜特別講演＞

「からだの自由と不自由」

講師：長崎 浩

(東北文化学園大学)

司会 荒木 雅信 (大阪体育大学)

表記のテーマで、体育心理学専門分科会の特別講演が開催された。演者の長崎浩先生（東北文化学園大学）は、都の老人総合研究所運動機能部門室長を勤められ、身体運動に関する現場的研究を精力的に行ない、従来のパラダイムを越えた独自の理論を構築された。特別講演は、先生が集められた膨大なデータを基に、専門のバイオメカニクスにとどまらず、神経生理学から情報処理的心理学や生態心理学アプローチまで広範な領域におよぶものであった。特に、中心的課題である「歩行」は人間のもっとも基本的運動であるが、これまでの運動心理学の研究ではあまり取り扱われて来なかったことが不思議な位である。運動の発生から上達の過程までにしか注目していなかったわれわれの学究的興味を、上達のその後まで広げるきっかけになった。来るべき高齢化社会を思うに、運動心理学の研究範囲の拡大につながれば、その意味も大きい。会場には、体育・スポーツ心理学関係の研究者ばかりでなく、バイオメカニクスや生理学分野の研究者も多数詰めかけ、講演後の討論の熱心さは、テーマの学際的意味と重要性を伺い知ることができた。以下、講演の要旨と討論のメモを記し、今後の糧としていきたい。



長崎 浩講師

（講演の要旨）

従来、身体運動に関する事実や法則を説明する「理論」として、情報処理的心理学と神経生理学がパラダイムになってきた。これに対して近年、生態学的心理学と力学システムからのアプローチが新しい理論として台頭し、この観点から事実の見直しと発見が進んでいる。両理論の特徴とそのえもいわれぬ関係にある問題点を指摘する。

運動に関する生態心理学的アプローチの典型例を、W.H.Warren らの「開口部のアフォーダン

ス」実験は、知覚と運動が直接関係することを主張するものである。このような観点で知覚と運動の発達、学習、制御につき多くの実験・観察が蓄積され、新パラダイムの生産性を明らかにしている。そして、光学的流動など知覚情報はダイナミックだから、これと力学システムとの関連が比喩的に強調されている。

しかし、これには方法上の問題がある。知覚と運動はどのような意味で「因果関係」にあるのか。知覚情報が力学に直結するとすれば従来のようなバイオメカニクスは使用できない。では、人が身体運動を「制御する」ことはいかなる因果法則に基づくのか。

ただし、身体運動研究の生態学的アプローチは有効だと思う。運動の重大な生態学的環境の一つは重力場である。例として、重力だけで歩く歩行のコンパスモデルを取り上げる。このモデルが「歩く」ためには歩行速度が180m/分以下、月面では73m/分以下が必要であり、後者はトリビアなことではない。また、ステップ周波数は毎分100以上なければならず、これは成人および老人のいくつかの事実を説明する。

歩行のコンパスモデルが有用である限り、重力場の要請に従うことが2足歩行の基本的な制約条件になっており、この条件は、系統発生的個体発生的に脳や心による歩行の制御に「先立つ」与件とみることができる。重力という生態学的場で人は歩き始める。

多くの行動的な現象というのは、心か神経系に動機づけられる。そこに原因をもっている。このダイナミカルシステムズ・アプローチに基づく新しい理論の試みが、従来の物理的な因果関係に基づく、いろいろな生態に対する挑戦である。さらに、生態学的な動作についての環境が持っている意味論から思いもかけないコペルニクス的な研究の課題が生まれてくるだろうし、現に運動発達・

視覚発達の分野を中心として、かなりの勢いで新しい知見が出されているのが現状である。



司会 荒木 雅信氏



徳永 幹雄氏

(討論)

山本氏(名古屋大学)：コンパスモデルの場合、外乱の影響が、どのように扱われているのかということがまず一つ。それと、拡張した形でいくと、もっと複雑な現象が説明できるのでしょうか。
長崎氏：第1点ですけれども、コンパスモデルというのは外乱がせいぜい歩幅を変える、歩調率を変えるという条件にしか使えません。これはモデ

ルとして当然です。

それから2番目、拡張した方がいいのではないかということですが、結構なことですけども、それにしては現在、あまりにも成果が乏しいというのが現状です。



山本 裕二氏

調枝（広島大学）：運動は間接の影響が大きいですね。だから先生がおっしゃる拘束条件を付けて、効率を考える。エネルギーの効率が特徴になるのは分かります。普通は歩行なんかだったら、本人がその拘束条件を作っているんですね。それは重要なことだと思うのです。体育ではよく怪我をします。そうするとあんまり緊密な拘束条件を形成したり、外部から拘束条件を与えるときに、それに応じた形で怪我をすることもあると思うのです。その裏側には拘束条件は厳密になったときに、怪我が生じるということはないのですか。こういう考え方は駄目ですか。

長崎氏：いえ、確かにそういうことが言えると思うのですね。これは体育の場合もそうですし、それからリハビリテーションの機能改善ということ

でも、そういうようなことが起こってくるだけであって、拘束が間違えたパターンとして、別のパターンを形成してしまうという形になりまして、そこにエネルギー的にも力学的にも無理があつて、パフォーマンスが悪くなるということになるかと思えますけれども。

ただ一方、リハビリの場面なんかを見ますと中枢神経系が冒されて、いわゆる陽性兆候といまして、震えが止まらないとか、関節がでたらめな方向に動きすぎるとかというような、そういうレベルで一番下の体の条件というものも生まれることもあるのですね。こういう陽性兆候に関しては、むしろ自由度を減らしていく方向が、体の不自由という身体障害に対する対処の仕方になると思います。



調枝 孝治氏と
熱気に包まれる会場

吉川氏（東海大学）：身体の自由と不自由というのは、身体を自由にさせておくと、身体的な機能のコスト・パフォーマンスに従って動くようになり、自分の意思とは関係なく自然にそうなるのが、いわゆる制約としての不自由であって、例えば、サイコロジカル・テンポといわれるも

の、食べるスピード、あるいは歩くスピード、あるいはスピードというカリズムです。そういったものが個人によって違う。非常にゆっくり歩いたり、しゃべったり、食べたりする人は、大体常に日常のテンポはゆっくりであって、そういう意味で早い人は早い、それは個性なのだというわけです。そうしますと、この場合の自由というのですかね、我々が持っている自由というのは、そういった例えばパーソナリティのような、個性がそこに反映できる余地がある場合と、それからもっと身体的な特性とか、あるいは運動力学的なそういう法則に従って動かざるを得ないような、そういう不自由さを持っているというふうに解釈してよろしいのでしょうか。

長崎氏：私の考えですが、一つのパターンに指定されるという不自由ではないですね。速度を変えるわけですから。それからもう一つは、そのエネルギー・コストのところと言うのを忘れてみただけでも、あそこに極小条件があり、このエネルギー・コストに限っては極めてなだらかなのです。したがって、一本の直線の上に限定されるという物理現象ではなく、そこをウロウロすることが、コストという面か、負担をかけないでできるということです。その幅があるのです。この幅の中で、もしかしたら個性の問題は上がってくるのかもしれない、と思います。

それからついでに申しますと、行儀作法のことを申し上げましたが、一般にスポーツのスキルや芸人のスキルは、この力学的な自由度を減らしていくという、不自由さに対する挑戦ではないか、というふうに思います。ですからコストもへったくれもない、ということでしょう。

吉川氏：そうすると、ここでいう不自由というのは一体、どういうふうにとらえていけばよろしいのでしょうか。

長崎氏：私は動作の自由、運動の不自由と言っているのです。ここで言っている身体の不自由を、運動の不自由と読み直していただきたい。そしてその運動の不自由というのは、運動がパターン形成されることであって、そのパターン形成を通じて自由度が減っていくことであるという意味です。矢部氏（名古屋大学）：一つ教えていただきたいのですが、先生が今お使いになっている言葉の中で、動作と運動という言葉が出ていますが、どのように使い分けたらよろしいのでしょうか。

長崎氏：日常的にパターン化した身体運動のことを動作というふうに呼んでおりますが、その意味で目的が込みになっている動作、モーターアクションのことを動作というふうに、私は呼んでいます。

矢部氏：そういう場合でしたら行為とか行動ですね、いわゆる意識が関与するということはどうでしょうか。

長崎氏：その意識というのは難しいですね。生態学的な運動、動作に対するアプローチというのは、この意識を消したいのですね。だからできるだけ、その意識に触れないような話しの作り方をしたいというのが、私の狙いの一つです。したがってそもそも入ってくる余地がないことの一つですね。

この意識ということ「イド」というふうに、「インテンション」というふうに、ずらして考えます。私自身の今の考え方は、その「イド」ということが入ってこない、非常にクリエイティブなレベルでもって、動作形成を考えるとということに止まっております。しかしながら、これは申し上げておきますけれども、エコロジカル・サイコロジストによる運動研究というのは、最近盛んに「インテンション、インテンション」ということを、先ほどの三角図式の一つ上に設定して、この「イド」によって情報と行為のモードが選ばれる

という言い方を盛んにするようになりました。なぜ、こんなことを言い出すのか、私はよく分かりませんが、こんなことをやりだすともう一度、心を経由した動作と環境の説明理論にセントライズしてしまうというふうに思っております。

矢部氏：それではもう一つ、先生のお使いになっている歩行というのは、比較的自動動作というか、意識のレベルが低い状態であると、それがいわゆる歩調になっているわけですね。それは遅く

するとか早くするということでは、意識でしょうか、意思でしょうか、その関与はどのような変化、あるいは影響を与えるのか。

長崎氏：この場合の意識というのは、歩行という動作が必要とする注意力ですね、それで測定されたものです。それを自然歩行、つまり通常歩いているスピードのところでは注意力が最小になるという、コストと同じ結果になります。

特別講演傍聴記

木島章文（筑波大学大学院体育科学研究科）

この表題をはじめてみたのは、事前に配布されたプログラムだった。そのとき私は「障害者のリハビリの話かな？」と勘違いをした。同じタイトルの新書を開いてみると、その勘違いに気づき、運動制御の話だとわかった。しかも、実験データはもとより、それ以外の資料（例えば小説など）も交えて難解な理論がわかりやすく説明されている。先生の勉強量の多さ、教養の深さを感じた。

講演は2部構成だった。あらゆる身体運動は内的、外的な拘束をうけ、一定のパターンに落ち着く（動作の成立）。これは自由度の減少、つまり「身体運動の不自由（化）」のプロセスとみられる。第1部ではこのような内容が自由度2（歩幅と歩調）の歩行を例に説明された。間違ってもリハビリの話ではなかった。

まず、拘束条件のひとつとして、エネルギー消費最小という制約が示された。つまりヒトの歩行速度はいろいろだが、どんな速度においても、エネルギー消費最小という拘束条件は満たされている。この関係は左記の2つの自由度から構成される平面上に、各速度のエネルギー消費曲線を書き加えた図でわかりやすく示された。なお、歩行では速度の増大において2つの自由度が比例関係にあるのに対し、走行ではこの関係が崩れ、歩幅は一定で歩調が変化する。私がここで印象的だった点は2つある。1つめは1歳児の歩行においてもこの拘束条件が満たされているということである。この拘束条件の充足が歩行成立の必要十分条件ということだろうか？2つめは、老人の歩行パターンにおいては速度が変化しても歩調は変わらないということである。乳児にも成人にも無い老人特有の

制約（次に提示される力学的制約？）があり、彼らはこれに適合するような2つの自由度の関係（運動プログラム？）を新たに成立させているのであろう（か？）。我々の歩行と老人の歩行が質的に違うということがたった2つの変数から明確に説明され、とてもかっこよかった。

次に力学的制約を拘束条件として話が進んだ。エネルギー消費の拘束とは独立してこの条件を考えるため、自由度2のコンパスモデルが示された。このモデル上では、歩行パターンは脚の長さ・重力のみに依存するが、そこから歩行パターンの成立における速度の上限（180m/秒）・歩調の下限（110歩/秒）が決まる。双方に関してヒトの歩行に関する実証データが提示された。

ここまででヒトの歩行パターンにみられる物理的拘束の痕跡が示された。第2部ではこの事実を解釈する理論の解説がなされた。主な論点は、中枢制御重視の理論（情報处理的モデル）と生態学的視覚論・ダイナミカルシステムズとの対比、そして後者導入の必要性であった。先に提示された歩行パターンをみると、前者でいう中枢制御は必ずしも必要でなく、身体内・外の物理的制約で十分説明できる。そこで後者の理論が有用とのことだった。それと同時に、生態学的視覚論とダイナミカルシステムズ双方の問題点も提起された。前者においては情報と運動の間の因果関係が明確にならず、両者間の相関を述べるに留まってしまうということだった。そして後者は機能的なモデルとし

て有用かもしれないが、通常の線形ではなく非線形力学を原理として据える必要があるとのことだった。これを踏まえて最後の方に、Rosenbaum (1991)の一文“Many behavioral phenomena surely originate in the mind or nervous system”を引用されたのが印象的だった。なお、フロアからのやり取りの中でも、生態学的理論における意図（intention）の位置付けについてコメントがあった。ただしそのときは生態学的な図式の中に意図を加えることで、「心を経由した動作と環境の説明理論」に立ち返ってしまうことを危惧されていた。

第1部のデータを説明する理論については最後までイメージが沸かなかった。私自身の不勉強故だろう。しかし、近年隆盛を誇る生態学的理論やダイミックスシステムズにわかりやすく触れられたのはうれしかった。それは第1部でシンプルかつ明確なモデルの提示があったからだろう。後日お話しした〇〇先生曰く「難しい話を難しく示すのは誰でもできることなんだけど、難しい話を簡単に示すのはすごく難しいんだよね。」とのことだった（〇〇先生に許可なく引用）。今回の講演はその道標だったように思う。私自身、このことを念頭におきながら研究活動に勤しみたいと思う。最後に有意義な講演を聞かせていただいたことについて、長崎先生と講演スタッフの皆様にご挨拶いたします。と同時に、この乱文をここまで読んでいただいた皆様にもお礼とお詫びを申し上げます。

一般研究発表 (座長報告)

<口頭発表>

演題番号 30 A 30701～30 A 30704

座長 丹羽 劭昭 (聖母被昇天学院女子短期大学)

「両手協応運動のタイミング制御に対する運動振幅の効果」

田島 誠 (広島大学大学院)

「対面条件の個人間協応における位相の安定性と正確性」

山西 正記 (広島大学大学院)

「小物体持ち上げ運動時の摘み力制御における視覚情報の役割について」

川合 悟 (帝塚山大学人文科学部)

「連続打球動作におけるフラクタル遷移」

山本 裕二 (名古屋大学総合保健体育科学センター)

両手協応運動のタイミング制御に対する運動振幅の効果

本研究は、両手協応運動課題を行わせる際の運動振幅を分析することによって、運動振幅の観点から両手協応運動のタイミング制御について検討したものである。その結果、両手協応運動における運動振動数と運動振幅の間には、一貫した関係はみられる、タイミング制御に対して運動制御が直接関与している事実は見出せなかったとしている。しかし、まだ実験の方法を工夫する余地が残っており、前述のような結論を出すのは少し早いと思われる。

対面条件の個人間協応における位相の安定性と正確性

Schmidtら(1990)が採用したリズムカルな動作課題における個人間協応パラダイムでは、神経筋

支配と動作方向の動作要因が、要求した動作モードでそれぞれ共に一致するか、または一致しないという結果となり、神経筋支配と動作方向のどちらの動作要因が位相の正確性や安定性に貢献するのか考察することができない。そこで本研究では、2名の被験者が対面する(FF)条件を採用することで、個人間協応事態の遂行において、位相の正確性と安定性に貢献する主な動作要因を解明しようと試みている。その結果、FF条件での個人間協応で、その位相の正確性および安定性に貢献している動作要因は神経筋支配よりは動作方向の動作要因であり、その傾向は動作周波数帯が高くなるほど顕著になることを明らかにしている。実験計画がしっかりしており、結果も比較的きれいに出了研究である。

小物体持ち上げ運動時の摘み力制御における視覚情報の役割について

人間は、多様な物理的性質をもつ物体を容易に持ち上げているが、その場合、持ち上げる前から力を発揮する物体の大きさ情報を留擁する者（依存群）とそうでない者（非依存群）がいることがわかっているが、本研究では、さらに小物体操作時に視覚情報が利用できなくなると、持ち上げ時の力発揮プログラムにどのような影響が生じるかについて検討している。その結果、依存群で依存する情報がなくなった場合、最も大きな力を擁する物体に対する力を準備する戦略を用いて対応していると推察している。わかりやすい実験のストーリーでしかも明確な結果の出た研究であった。

連続打球動作におけるフラクタル遷移

外部入力を考慮したダイナミカルシステムに基づいて、マクロな人間の動きである連続打球動作についての一連の研究である。

本研究では、同じ入力を繰り返し入力する周期入力条件と二つの異なる入力を確率的に切り換えて入力する切り換え入力条件の2条件を設定することで、連続打球動作時の運動フラクタル遷移を

検討している。その結果、両条件で4つのクラスター及びそれらを結ぶ8軌道が確認された。そして8種類の異なる出力は入力の系列効果（時間構造）を反映し、周期入力条件における励起アトラクタ間のフラクタル遷移としての構造をもっていることを明らかにした。蓄積された成果とかなり難しい理論をできるだけやさしく説明する努力をした発表で、多くの参加者の関心をよび、熱気に包まれたセッションとなった。



丹羽 劭昭氏

演題番号 30A30705～30A30707

座長 調枝 孝治（広島大学）

「ボディワーク時のイメージに関する一考察—仕手と受手の生理心理的变化について—」

林 悠子（奈良女子大学）

「ウォーキングが感情の変化に及ぼす影響の検討」 鈴木康弘（東洋英和女学院大学）

「弓道選手における自律訓練法を用いたバイオフィードバックトレーニングによる心拍制御について」

丹羽劭昭（聖母被昇天学院女子短期大学）

僭越ですが、以下に疑問点のみ述べます。まず林氏の研究目的は、精神的ストレスを解消するためのボディワーク（身体に「ふれる」と「なでる」）中に、仕手側が自己の身体に注意を向けたイメージをした場合にそのイメージ内容によって仕手側と受手側の心身にどのような影響があるかを検討するとなっています。この研究目的の表現は正確が必要です。それは、仕手のイメージは仕手の心身やワークに直接影響を及ぼすと考えられますが、仕手のイメージが即受手の心身に影響を及ぼすのではなく、仕手のイメージの結果としてのワークが受手の心身に効果を及ぼすとするのが自然です。この観点からの結果と論議の再検討を望みます。次回の研究で仕手と受手の効果的な共通イメージを検討されていますので混乱を避けるためにも大切です。また、イメージ→ワーク→リラクセーションという操作課題と結果に対応させて、多様な測定「心拍数、呼吸数、皮膚温、気分調査（UMCL：エネルギー覚醒・緊張覚醒・快感度）、自由記述」の詳細な説明と解釈が不可欠です。

鈴木氏の研究は、太古（？）の昔から引き継がれています人間の非合理的行動の解明です。それは、「継続的な運動は健康に良いと分かっているが、なぜ人は運動をしないのか」です。そこで、歩行（運動強度：心拍数、120拍/分）の前後に感情（Mood Check List-3）の測定を行い、歩行が快感情、リラックス感、満足感に及ぼす効果を検討されました。その結果は、歩行は良い感情を生じさせるというものでした。・・・しかし、「では、なぜ人々は歩かないのだろうか？」という現実が繰り返されるのです。この種の非合理的行動の研究は、対象となっている行動のポジティブな価値や効果はよく分かっているのです。

今後は人間の欲求構造（～したい）の階層性（質的レベル）の優先順位の研究が重要です。

丹羽氏の研究は、弓道の的中率の向上は、自律訓練法を用いての心拍バイオフィードバックトレーニング（HR・BFT）により可能かどうかの検討です。その前提として、果たして自律訓練法を用いたHR・BFTで(1)心拍数は減少し、またそれを(2)自己制御可能かを検討し、その可能な前提から最終的には(3)弓道の的中率の向上に結びつけたいと考えられています。今回の報告は、(1)(2)の前提は可能であるとの結論でしたが、肝心の(3)への効果はまたの機会ということでした。興味のあるドラマには必ず「つづき」がありますので期待します。疑問点は、弓道のスキルの向上に果たす心拍変動の機能にはどのようなものがあり、どの程度重要なのでしょうか。それは、行射時と自律訓練時の心拍変動の独立性や緊密性の検討と成績への効果的関与が訓練によりどのようになるのかという点です。



林 悠子氏

演題番号 30A50701~30A50703

座長 遠藤 俊郎 (山梨大学)

- 「体育授業における目標指向性と内発的動機づけの関係」 安達 裕介 (広島大学大学院)
- 「大学運動部にみるリーダーシップ現象とその特徴」 大矢 隆二 (常葉学園大学)
- 「スポーツ競技場面における社会的スキル」 杉山 佳生 (鹿屋体育大学)

第50回記念大会で、なおかつ体育・スポーツ関連学会連合大会という冠が付き、通常の学会大会と異なる雰囲気があったのか、学会初日でしかも朝一番のセッションという参加者サイドから考えると決して好都合とは言えない条件にもかかわらず多くのと表現しても許される数のフロアーを迎え、スポーツ社会心理学的側面からの3演題の発表が定刻に始まった。

安達氏らの発表は、「体育授業における目標指向性と内発的動機づけの関係」というテーマのもと、先行研究から作製した「目標志向性」、「内発的動機づけ」、「運動有能感」、「授業風土」に関する調査を男子中学生116名に実施し、因子構造、各尺度間の関連を検討したものだ。その結果、体育授業における目標志向性が熟達目標と成績目標の2つの主要な達成目標から構成されていることを再確認し、さらに、両目標を高く認知しているものは内発的動機づけの高いこと等を明らかにした。授業風土の認知と目標志向性の関連性をも検討しようという意欲的な発表であったが、発表テーマと必ずしも各調査から得られた結果に関する論議がかみ合わなかったという印象が残念であった。このことは各調査そのものの結果にのみ目がいき、目標志向性を独立変数とし、その上で従属変数として他の調査結果を詳細に分析

する手続きが取られなかったことに起因するものと思われた。さらに、因子構造の検討の際、基とした概念に関する発表者自身の規定が不十分なため因子の命名が安易になっている、との指摘もフロアーからなされた。

大矢氏の発表は、フィドラーによるLPC (Least Preferred Coworker) 尺度の修正版と三隅のPM式リーダーシップ論を基に氏が作製したリーダーシップ行動調査を用いて、大学運動部員及び一般大学生のリーダーシップ行動の特徴を明らかにしようとするものであったが、明らかな結果は見いだし得なかった。フロアーから、2つの調査とも集団における人間関係や行動を問題としているが一般学生は集団(特にスポーツ集団)に馴染みのない場合が考えられる、という調査対象の適格性と調査内容の適合性に関する質問がなされた。加えて、用いた調査用紙の妥当性や信頼性の検討不足、分類対象数の不均一性、統計的検討不足、等が相まって結果をより混沌としたものにしたものと考えられた。今後継続的に研究を進めるとしたならば、問題意識の焦点化と研究方法に関するより真摯な取り組みが望まれた。

杉山氏は、「スポーツ競技社会的スキル」を心理的競技能力ととらえ、この測定ツール開発の前段階としての因子構造の検討、さらに、社会的行

動に関連する一般的個人特性との関連から抽出された因子を規定する要因を検討しようとした。その結果、抽出された5因子によりスポーツ競技社会的スキルの60%が説明可能であること、さらに、それら各因子は関係のあり方はそれぞれ異なるが社会的行動に関連する一般的個人特性によって規定されていることを指摘した。この研究では問題意識も明確であり、方法論的にもほぼ安心できる発表内容であった。ただ、因子構造の検討に際し5因子を抽出しているが、第5因子に関しては負荷量の高い項目が1項目のみにもかかわらず因子の抽出と命名を行っていた。因子の解釈可能性から考えると若干の無理があると思われ、もしそれでもなお重要と考える因子であるならば関連する質問項目を追加して再分析することが求められるかもしれない。



遠藤 俊郎氏

演題番号 30A50701～30A50703

座長 杉山 佳生 (鹿屋体育大学)

「体育教師の指導による学生の人柄と精神健康度について IV—教育実習10カ月の精神健康度と実習校から受けた評価—」
呉 萬福 (国立台北師範学院)

「スポーツ行動の予測変数およびメンタルヘルスに関する日米比較」

橋本 公雄 (九州大学健康科学センター)

「大学生における自己の身体に対する意識と異性に対する理想像 (第2報)

—体型評価と身体満足度に着目して—」
遠藤俊郎 (山梨大学)

「知的障害者に対するスポーツの取り組みの実態と課題について

—知的障害児施設におけるスポーツ活動の実態調査—」

溝口 紀子 (静岡県立大学短期大学部)

呉先生は、小学校で教育実習を行っていた国立台北師範学院の第一回卒業生を対象に、U-Kテストを用いて精神的健康度を調査した。その結果、

「分裂型」が最も多く約半数を占めていることが明らかにされたが、その様相は、調査対象者らが在学していたときと同じ傾向だということであっ

た。この結果について、呉先生は、「卒業生は実際の現場に出てストレスが増大しているのにもかかわらず、精神的健康度が在学時と同じ水準に維持されているという点が評価できる」とコメントしていた。本研究は、教員養成系大学における教育の有効性を検証する研究であると見なすことができ、様々な側面からのさらなる追跡調査が期待される。

橋本先生らは、Fishbeinの行動意図予測モデルを用いて、スポーツ行動を予測する変数に日米の学生間で違いが見られるかを検討した。結果、行動意図については、米国の学生のほうが日本の学生よりも、定期的にスポーツするという意図の高いことが明らかになった。行動意図を予測する変数については、日米ともに、「運動の効果」及び「効果に対する評価」が行動意図に有意に影響していたが、これらの変数の規定力に違いが見られることが指摘された。また、「親友の期待に従う動機づけ」の影響力について見ると、日本ではほとんどない一方で、米国では負の影響となっていることが示された。このように、本研究において、行動意図を予測する変数の影響力に日米の学生間で違いがあることが示唆された。今後、日米の違いを生み出している原因の探求も含めて、この行動意図予測モデルを用いた比較研究がどのように展開していくのか楽しみである。

遠藤先生らは、大学生が自分の身体に対してどのような意識を持っているのか、また、異性の身体に対してどのような理想像を持っているのかを、第2報として、体型評価と身体満足度に焦点をあてて検討した。結果、自己の体型評価については、男女とも実際と理想の間に有意な違いが認められた。また、身体満足度について見ると、男

女ともほとんどの部位で不満足感を示していたが、その程度は女子において顕著であるという傾向が見られた。全般的に見て、理想値と実測値の差が小さいほど満足感が高いようであった。座長の個人的関心からの感想であるが、今後の研究で、大学生の身体理想像がどのように形成されてきたのかが解明されれば面白いのではないかと思った。

溝口先生らは、知的障害児施設におけるスポーツ活動の実態調査を行い、それらの施設でのスポーツ活動の取り組み状況を明らかにするとともに、今後の課題を指摘した。現状分析では多くの施設でスポーツ活動が行われているが、実際に指導にあたっている人の85%がスポーツやレクリエーションの資格を有していないということが明らかになった。しかし、障害者に対する理解が深い専門職員が行うスポーツ指導にもそれなりの意義があると考えられ、このようなことから、本研究は、障害児施設の専門職員とスポーツ指導の専門家が今後どのように連携していくべきかを考える契機となるような調査であったと言えそうである。



呉 萬福氏

演題番号 30A30901~30A30903

座長 吉田 茂 (筑波大学体育科学系)

「テニスのサービスコース・球種予測に関する研究 — 予測能力別の予測手掛かりについて —」

武田 守弘 (広島大学大学院)

「視覚の状況判断と心理的側面との関連性」

伊達 萬里子 (武庫川女子大学)

「運動経験の言語かとモデリング学習」

井上 則子 (津田塾大学)

武田氏らの発表では、テニスのサービス予測能力を時空間遮蔽法を用いてその特徴を検討した。高予測者はボール、下半身などの部分情報源よりも、動作全体情報をもとに判断していることを示した。そして自分のもつ動作のモデルと照合する認知方略を推奨した。遮蔽法の限界、画像停止による時間余裕についての質問には検討を重ねるとの回答、知識水準の問題かとの質問には手掛かりを押さえた上での全体動作把握であろうとの回答があった。今後、動的な全体パターンの分析・認識研究への進展を期待したい。

伊達氏らの発表では、ハンドボール選手の心理特性と動体視力訓練との関連を検討し、視覚機能による状況判断は決断・予測・判断と関連があることを示した。そして視覚機能促進には身体訓練とメンタルトレーニングを併用することが有効であろうとした。鉛筆による動体視力訓練の効果には疑問があるとする質問には、データでは有意差があるがさらに検討するとの回答があった。今後、ハンドボール動作特性に合わせた独自の視機能訓練法を工夫されることを期待したい。



井上 則子氏

井上氏の発表では、縄跳び(二人二本交互)課題学習において言語化効果を検討した。運動経験の言語化による身体の解放感の効果はみられなかったが、技術の習得、動きの有能感を高める効果が示された。そして解放感は運動特有の効果であろうとした。動作、イメージ、言語の表現のずれをどう考えるかとの質問にはさらに討議したい、ペダルなどの比喩表現の有効性についての質問にはまさにそのコツを提示したとの回答があった。今後、基準達成ではなく成功回数を指標として分析

すること、被験者の言語内容（手掛かり、タイミングなど）についても検討を進めて頂きたい。

3 演題に共通した主題は、実践面で有用な運動状況の手掛かりの検出とその訓練法であり、これからの大きな仕事としてその系統図を作り上げていって頂きたい。

最後に提案として、口頭発表の討議時間を長くできるように、発表は目的・結果を中心にして短縮してはいかがであろうか。



伊達 萬里子氏

演題番号 30 A 30904～30 A 3090 座長 伊達 萬里子（武庫川女子大学）

「全日本女子ホッケーチームの心理的特性について
—1998年アジア大会までの心理的サポート—」 阿江 美恵子 （東京女子体育大学）

「国民体育大会参加者の心理的サポートに関する調査研究
—参加選手（第53回大会）の実態—」 黒田 一寿 （東京工業大学社会理工学研究科）

「国民体育大会参加者の心理的サポートに関する調査研究
—参加指導者（第53回大会）の実態—」 石井 源信 （東京工業大学社会理工学研究科）

全日本女子ホッケーチームの心理的特性について
選手の多様な性格特性はチームに必要な集団の凝集性を低下させる可能性があり、パフォーマンスに影響を及ぼすと考え、その改善方法として、組織的な心理的サポートの必要性を示唆した。研究方法は、東大式エゴグラム等を用いた選手の心

理的特性の分析から、競技面におけるマイナス要因を検討し、アジア大会まで心理的サポートを行った。しかし、選手の心理的特性は個人差が大きいため、心理的サポートによるプロフィールの変化は認められず、その有効性は立証できなかった。

この研究の問題点は、質疑応答で指摘されたように、心理テストの実施に関しては研究者と監督、選手との信頼関係が大切である。問題解決への手がかりを得るには各心理テストの内容を十分に吟味し、適切な手法によって検討しなければならない。

第二に、メンタルトレーニングは個人差に配慮して処方することが必要条件であり、心理的サポートの基盤であるといえよう。

今後の研究においては、各心理テストの多面的な診断結果から総合判定を行い、心理的サポートシステムとして構築されることを期待したい。

国民体育大会参加者の心理的サポートに関する調査研究—参加選手の実態—

この研究は選手への心理的サポートの現状把握と、その体制のあり方を検討したものである。研究方法は、アンケート集計を行い、選手の抱える問題点について調査し、心理面に焦点を絞って分析した。結果では、選手がメンタルトレーニングの必要性を感じていることから、サポート体制の整備が急務であると指摘した。そのため、問題解

決に向けて各都道府県、種目、性差、年齢等、属性間の因果関係を解明した上でメンタルトレーニング効果を立証する具体的な方法論を提供して頂きたいと考える。

国民体育大会参加者の心理的サポートに関する調査研究—参加指導者の実態—

この研究は、2.の研究と関連しており、監督、コーチによる心理的サポートの実施状況について調査したものである。研究方法は、2.と同様にアンケート集計を行い、指導者の抱える問題点について、心理面に焦点を絞って分析している。分析結果から、指導者は指導内容としてメンタルトレーニングの必要性を感じており、サポート体制の環境整備を早急に望んでいることが判明した。しかしながら、心理的サポートシステムを円滑に機能させるには、時間的余裕やメンタルトレーニングの知識・理解不足など、問題にたいする具体的な解決策が見いだせず、現状では困難であると報告した。この問題に関しては、今後の継続研究の成果を期待し、種目特性別の実践的、効率的指導指針となる資料の提供を希望するものである。

演題番号 30 A 50901～30 A 50902

座長 平井 タカネ (奈良女子大学)

「幼児の運動能力の発達と園環境・家庭環境・遊びの傾向との関係」

吉田 伊都美 (東京学芸大学大学院)

「幼児運動能力の検査の測定条件による記録の変動に関して」 森 司郎 (東京学芸大学)

幼児の運動能力の発達と園環境・家庭環境・遊びの傾向との関係

約10年前に行われた調査報告との比較から今日の児童・生徒の体力・運動能力低下がすでに幼児期において生じていることが推測され、このことを受けて全国の幼稚園・保育所の4～6歳児約12,000名を対象として計8種類の運動能力測定を行った報告がなされた。その結果、(1)園児一人あたりの園庭や園舎の広さや保育者一人あたりの園児数と幼児の運動能力には一定の傾向を認めなかったが、(2)「25m走・両足連続飛び越し・往復走」など動的な運動能力は、運動指導に力を入れていたり、施設への配慮がされている場合に評定点が有意に高かった。さらに、(3)男女児ともにほとんどの種目で兄弟数が多いほど、また三世代以上の同居や一戸建てという家庭環境の場合に評定点が高く、また外遊びやその種類が多いこと、外遊びのリーダーあったり、運動遊びが上手などの要因が影響するという興味ある結果が報告された。なお、ある種目が特別な要因に限って結びついてはいないが、動的あるいは静的な運動能力が指導の態勢に関連することが推測されており、運動種目を特性別に分類・検討してはどうか、また園における集団遊びの時間や形態についても検討してはどうかなどの意見が出された。

幼児運動能力検査の測定条件による記録の変動に関して

幼児における運動能力の発揮と動機づけ、練習効果の関連について3つの実験をした結果から報告された。(1)応援(〇〇ちゃん、がんばって!)の効果は、立ち幅跳びと両足連続跳び越しに認められ、ボール投げには認められなかった。この結

果について、応援はどのようになされたのか、またボール投げに応援効果がなかったという結果の理由について質疑応答がなされた。(2)25m走と体支持持続時間では、特に25m走において能力差が小さい条件で競争を行った方が能力を最大限に発揮しやすい結果であった。このことについても質疑があり、幼児期に競争的にがんばらせることの意味が問題にされた。(3)立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しは現在2回行っているが、実験では前後半2回ずつ行わせ、前後の比較をした。その結果3種目ともに練習効果は認められなかった。このことについては、どんな練習をさせたのか、また2回ではなく1回ではどうかなどの質疑が出された。



平井 タカネ 氏

演題番号 30 A 50903～30 A 50906

座長 中込 四郎 (筑波大学体育科学系)

「目標志向性に及ぼす動作法の効果」

小坪 昭仁 (千葉商科大学)

「動作法が認知スタイルに及ぼす影響について」

佐藤 早苗 (秋田県立本荘養護学校)

「動作によるイメージ表現が身体意識に及ぼす影響について」

久禮 直容 (奈良女子大学大学院)

「摂食障害(過食症) グループ療法におけるリズム・身体表現の試み(2)」

平井 タカネ (奈良女子大学)



佐藤 早苗氏



中込 四郎氏

＜ポスター発表＞

演題番号 30G10701～30G10707

「疲労回復時における中枢神経系活動変化 —睡眠脳波(PSG)を指標として—」

松田 哲也 (玉川大学大学院工学研究科)

「運動パフォーマンスに及ぼす前頭筋EMGバイオフィードバックの効果」

後藤 千明 (奈良女子大学)

「心理的ストレス解消に及ぼす運動の効果」

佐久間 春夫 (奈良女子大学)

「DVA動体視力の加齢影響と性差」

石垣 尚男 (愛知工業大学)

「眼球運動の加齢影響と性差」

吉井 泉 (大阪府立大学)

「変換視における過剰学習と減速期の変動」

平田 智秋 (筑波大学体育科学研究科)

「複数の運動課題を練習するときの練習スケジュール方略」

工藤 孝幾 (福島大学教育学部)

ポスター発表傍聴記

平田智秋 (十文字学園女子短期大学非常勤講師)

10月7日のポスター会場で見たこと、感じたことを書く。初日午前中ということもあり、人もまばらであった。土曜日のバイオメカニクス分野のポスター会場にも参加したが、そちらの熱気と較べると、いくぶん大人しい感があった。

こんな印象を受けるのは、まず自分が“壁の花(?)”であったからだろう。拙い発表ゆえ、ポスターを通じて新しい人達とお知り合いになることがなかった。ポスターの前を通りすぎる人に話を聞いてもらうには、発表内容の工夫が必要である。では体育学会、しかも心理の分科会にタイムリーな話題は何か、その内容を分かりやすい形で提示しているか、考え直す機会になった。特に内容についてはい

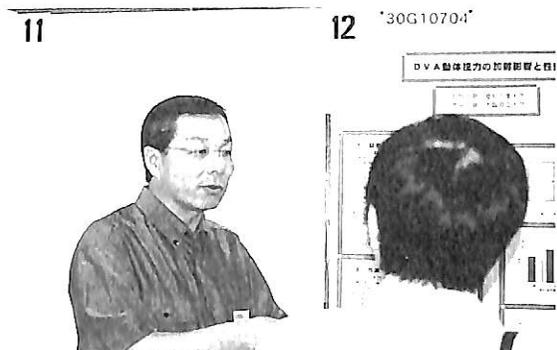
まだに答えが出ていないが、とにかく口頭発表とは異なり、ポスターでは興味を持ってもらった人とゆっくりお話する余裕があるので、内容や提示方法には人を引き込む工夫が必要である。

また工学系からの発表なども有り、体育学会を通じていろいろな分野の人達とお話する機会があった。けれども自分も含めて、どの位の人がその機会を生かしたかには疑問が残る。これはあくまで主観だが、周囲にそば耳を立てると「御無沙汰してます、お元気ですか？」から始まって、内容のお話が出る、といった会話が多かったように思う。発表内容が多岐にわたってきているのに、知己とのやりとりだけで時間が過ぎてしまうのは残念である。た

だ、ふだん会えない知人と顔を合わせ（お酒を片手に）話しこむ，“ハレ”の場としての学会は大歓迎である。「お知り合いと話しこむのは会場を出てお店に入ってからにして、会場ではなるべく多くのポスターに突っ込みを入れて下さいな」、が僕の率直

な感想である。

最後になったが、記念大会ということもあって大規模な大会の企画・運営に携わった、スタッフの方々にお礼を申し上げたい。



石垣 尚男 氏



工藤 孝幾 氏

演題番号 30G10708～30G10714

「一過性の有酸素運動がもたらす心理学的効果の検討 —運動が肯定的感情に及ぼす影響—」
荒井 弘和（早稲田大学大学院）

「健康エクササイズ教室参加者の心身に与える効果—セルフエフィカシー強化を意識した働きかけ—」
竹中 晃二（早稲田大学）

「身体的自己尺度の作成」
蓑内 豊（北星学園大学）

「組織キャンプにおける参加態度とメンタルヘルス効果との関連について」
西田 順一（九州大学大学院人間環境研究科）

「スポーツ選手のメンタルヘルス尺度の開発とその有効性」
村上 貴聡（九州大学大学院人間環境研究科）

「高齢者の健康行動が主観的幸福感に及ぼす影響に関する研究」
安永 明智（九州大学大学院人間環境研究科）

「メンタルヘルスに及ぼす高齢者の運動に関する研究 —水中運動教室参加後の心理的变化について—」
渡辺 英児（中京大学体育学研究科）

ポスター発表傍聴記

蓑内 豊 (北星学園大学)

今回のポスター発表は、大きな体育館の中で開催され、隣では他の分科会や共催シンポジウムのポスター発表が同時に行われた。そのためか、体育・スポーツ心理学の関係者のみならず、多数の他分野の研究者の方が訪れ、活発に討論がなされていたように思われた。



蓑内 豊氏

荒井氏らの研究では、被験者に12分間の中程度(RPE)の運動(自転車エルゴメーター)を行わせ、運動の前後と運動中に、肯定的感情(EFI)と快感情(FS)を測定し、一過性有酸素運動の心理的効果について検討している。その結果、EFIの「高揚感」と「再活性化」の因子において、運動後に有意な向上がみられ、運動の心理的効用に対して貴重な示唆を得た。今後は、様々な運動強度や時間、運動内容での続報が期待される。

竹中氏らの研究は、従来行われてきた「スポーツ指導・体力増強」型の健康教室とは全く目的を異にし、「ライフスタイル・メンタルヘルス改

善」型の健康教室への取り組みの報告であった。ここでは運動指導より、むしろ健康カウンセリングを通して、参加者の日常行動および認知的側面に対して積極的に関わることによって、行動変容を図る試みがなされ、概ね良好な方向への変容がみられたと報告している。この成果をふまえ、今後日本の各地においても、「ライフスタイル・メンタルヘルス改善」を目的とした健康教室の取り組みがなされることが望まれる。

蓑内の研究は、Foxら(1989)が開発したPhysical Self-Perception Scaleの日本語版を作成し、その尺度の信頼性、妥当性、構成概念的妥当性について検討した。その結果、この尺度の有効性が認められたことが報告された。今後、身体に関連する自己知覚を測定する場面で、この尺度が数多く用いられることが望まれる。

西田らの研究では、キャンプに参加した小学生を対象として、キャンプへの参加態度(楽しみ-苦しみ)が、キャンプ参加者のストレス反応にどのように影響するのかを検討した。その結果、「不機嫌・怒り感情」の因子において、群×時間の交互作用がみられ、キャンプは苦しいものだと思っていた者において、キャンプ参加後に「不機嫌・怒り感情」の得点が有意に低下していたことが報告された。態度とストレス反応の関係について、今後の続報が期待された。

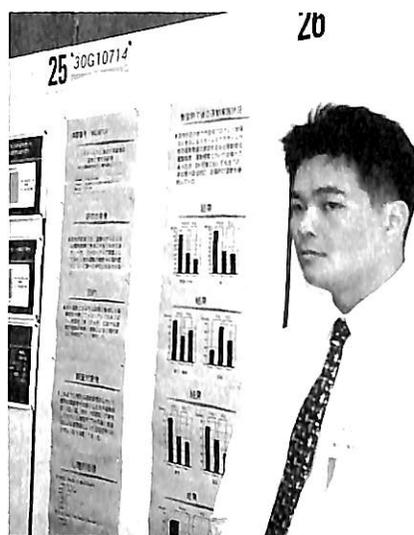
村上らの研究は、スポーツ選手のメンタルヘルス尺度の開発を目的として、質問紙を作成し、統計的手法を用いて分析がなされた。その結果、競技場面9因子、日常場面6因子から成るメンタルヘルス尺度の有効性が認められたことを報告して

いる。今後、スポーツ選手のメンタルヘルスの測定、診断にこの尺度が使用されることが望まれる。

安永らの研究は、在宅高齢者を対象として、「日常生活動作能力(ADL)」の変化と「主観的幸福感」、「自覚的健康感」、「同年輩他者との健康の比較」の関係をみたものである。この結果、ADL機能を維持・向上していることが、心理的健康の維持につながることを示唆された。今後、健康行動や個人の健康への認知が心理的健康にどのように影響するのかについて、さらなる調査・研究がなされるようなので、楽しみである。

渡辺らの研究では、運動による介入研究に参加した高齢者を対象に追跡調査を行い、教室終了3ヶ月後の運動継続の有無および心理的变化について検討したものである。結果は、3ヶ月後においても全ての参加者が自主的に、計画的に運動を継続しており、心理的効果も継続していた。これらから、運動を継続することによって心理的効果が維持・改善されることが示唆されたが、どのよう

な働きかけが運動の継続につながるのか、さらなる研究が期待される。



渡辺 英児氏

演題番号 30G10901～30G10915

「少年サッカー選手に対する視野拡大のためのルックアップトレーニング」
江角 慎司 (筑波大学体育研究科)

「トランポリン運動のストレートジャンプにおける言語教示の抽出に関する基礎的研究
—着・離床時について—」 平井 敏幸 (日本体育大学)

「トランポリン選手における心理的スキルトレーニングの縦断的検討」
石村 宇佐一 (金沢大学)

「メタ分析を用いた競技意欲の検討 —競技レベルとの関係—」
磯貝 浩久 (九州工業大学)

「ISM法によるチームの目標設定」 栗木 一博 (仙台大学体育学部)



熱気あふれるポスター発表会場

- 「チームスポーツのメンタルコンディションについての検討
ーラグビーチームのゲーム前のメンタルコンディションについてー」
下園 博信 (福岡大学スポーツ科学部非常勤講師)
- 「動作法の女子長距離選手のフォーム改善への影響 ー腕振りの改善を中心としてー」
鯉川 なつえ (順天堂大学スポーツ健康科学部)
- 「スポーツ選手の催眠時における暗示語の研究 (3) ー現役陸上短距離(100m)選手を対象としてー」
立谷 泰久 (日本体育大学)
- 「体育授業におけるフロー経験 ー大学生・専門学校生を対象としてー」
川端 雅人 (東京電機大学)
- 「青少年期のスポーツ活動におけるBurnout症候群に関する研究」
河辺 章子 (神戸大学発達科学部)
- 「アスリートの『競技引退イメージ』に関する考察 ー競技引退生起条件との関連性」
大場 ゆかり (九州大学大学院人間環境研究科)
- 「中高年者における運動行動変容の段階と身体的・行動的要因の関係」
岡 浩一郎 (早稲田大学人間科学部)
- 「女子アスリートの摂食行動 ー競技種目の影響ー」
小牧 久見子 (早稲田大学大学院)
- 「体育系大学生の精神的健康 (1) ーその特徴と不合理的信念の影響ー」
西野 明 (大阪体育大学)
- 「体育系大学生の精神的健康 (2) ーソーシャル・サポートと友人関係の特徴に着目してー」
土屋 裕睦 (大阪体育大学)

ポスター発表傍聴記

西野 明（大阪体育大学）

10月7日～11日の5日間、東京大学駒場を会場として、日本体育学会50回大会が盛大に開催されました。記念大会ということで、様々なイベントや関連学会の同時開催なども行われました。私は、昨年開催された49回大会（愛媛大学）では、母校ということもあり主に実行委員として参加しました。今回は、4年ぶりに発表者として本大会に参加するために、多少の緊張感を抱きながら大会を過ごしました。

大会初日、ポスター会場の下見と雰囲気を感じ取るために、会場へ足を運びました。すでに、各ポスターの前で白熱した議論が展開されており、学会へ来たという実感が湧いてきました。体育心理学のポスターと同時に、共催シンポジウムのポスター発表、大学院の紹介があり、会場は沢山の人が賑わっていました。予定時間を過ぎてても、ポスターの前で真剣なやりとりを見ることができました。

大会3日目、ポスター発表当日。ポスターを掲示して、準備は万全。発表時間までは口頭発表の会場へ行きました。口頭発表の会場は毎年のごとく(?)、前の席が空いているにも関わらず、後ろは立ち見で一杯でした。この光景はどこかで見たことがある……そうです、大学の授業風景に似ているのではないのでしょうか(!?)。改めて色々なことを考えさせられたような気がしました。さて、発表の方ですが、着座時間の10分前に会場へ到着しました。資料等の準備をして、

ポスターの前に立ちました。合計で10名程度の先生方と色々な議論をすることができました。私の気づかなかった点を指摘して下さったり、発表内容に同調してもらったりと、自分の研究について改めて整理する機会を得たと感じました。久しぶりの発表で、最初のうちは少し緊張気味で、発表中は周りを見る余裕もなく、自分のことで精一杯でしたが、徐々に落ち着きを取り戻しました。発表時間終了後、他の発表者が、どのようなポスターを作成しているのかを見て回りました。ポスター発表らしく、色使いの鮮やかなものから、ビジュアル系まで多種多様でした。私も、ポスターを作成するにあたり、どのようにすれば目立つだろうか、綺麗に見えるだろうかと思案しました。ポスター発表にはこのような楽しみ(苦しみ)もあります。



西野 明氏

現在、日本体育学会の専門分科会の中で、ポスター発表があるのは体育心理学とバイオメカニク

スの2分野だけです。国際学会では殆どがポスター発表形式で、日本の学会（日本心理学会、スポーツ心理学会等）においてもポスター発表の形式が増加しています。研究者とのダイレクトな議論、他の領域との交流にもポスター発表は効果的

なのではないでしょうか。口頭またはポスター発表の選択は研究者自身によるもので、これからは発表内容等の検討から上手く使い分けていく必要があると思います。

ポスター発表傍聴記

磯貝 浩久（九州工業大学）

今回のポスター発表は、展示会場、大学院紹介コーナー、休憩所などの各コーナーとともに体育館を利用して行われた。第50回記念大会ということもあり、ポスター会場には多くの人達が集まり活気に満ちていた。ただ、口頭発表の会場と少し距離があり、真面目に発表を聞かれる先生にとっては往復が大変だったかもしれない。ポスター発表の数は、29演題で口頭発表（26演題）よりも多くなっていた。発表された研究内容も多岐にわたっており、内容についての感想を述べることは困難であるため全般的に感じたことについて書かせて頂きたい。

体育心理専門分科会でポスター発表を取り入れて、たしか4回目の大会になると思うが、今回のポスター発表の形式は、会場などとの関係により従来とは若干異なっていた。いくつかの分科会が同じポスター会場を利用していたということ。もう一つは、これまでは5分間の研究内容の発表のち質疑応答になっていたが、今回は発表なしの質疑という形で行われたことなどがある。5分間の発表の有無について、話をしないと発表の緊張感が味わえないという声も聞いたが、反対に質疑の時間が長くなり多くの人とディスカッションできたという声もあった。どちらのやり方も一長一

短があると思われるが、はたしてどちらが良いのだろうか。



磯貝 浩久氏

ポスター作成に関してであるが、各研究者が様々な工夫を凝らしていたことがとても印象に残っている。写真を上手に使っているポスターやカラフルなポスター等々である。隣の芝は青く見えるというが、自分のトラディショナルなポスターと比べて他の発表者のどれもが綺麗に見えた。それでおもわず、作成したソフトやプリンターをたずねて回った記憶がある。聞くところに

よると、外国の学会ではポスターの見た目の美しさを表彰する制度があるという。そんなシステムを取り入れると、よりいっそう綺麗なポスターができるのかもしれない。また昔参加したアメリカの学会 (AAASP) では、ポスター会場でビールやソフトドリンクを販売しており、ビールを飲みながらリラックスした雰囲気での議論が交わされていた。そんな方式も是非取り入れていただきたい

と、アルコールの好きな者としては思ってしまう。

自分の興味関心のある研究テーマや研究者と意見交換できる等の理由から、ポスター発表が増加してきており、今後もさらに増えていくものと思われる。そこで、さらに魅力的なやり方を工夫していただけることを期待しております。

日本体育学会ポスター発表傍聴記

大場 ゆかり (九州大学大学院人間環境学研究所)

ポスター発表会場は、口頭発表会場とはやや離れた場所に設置されていましたが、書籍や機器の展示会場と隣接していたこともあり、非常に多数の来場者があったように思います。また、多くの発表者が、発表時間とは関係なく、かなりの長時間にわたって、訪れた質問者との活発なディスカッションを展開し、会場内は熱気に満ちていました。ただ、掲示場所が狭く、発表者がポスターの前で説明をしたり、ディスカッションをせざるを得なかったため、掲示されているポスターを発表者自身が遮ってしまわなければなりません。これだけ多くの来場者があると、発表者がディスカッションをしている傍らで掲示されているポスターそのものの意義が大きくなってくると思います。その点について考慮して会場準備をして頂けたらよかったですのではないかと思います。

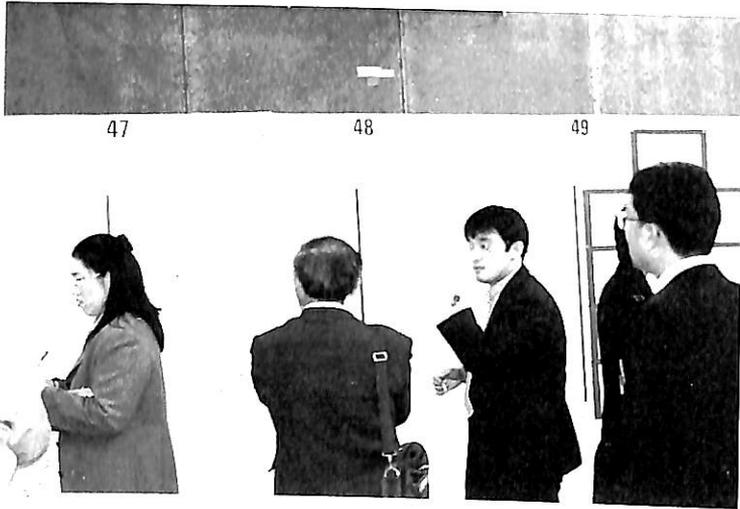
できたことも、非常に意義深いことでした。発表終了後に、数人の発表者に尋ねてみましたが、体育心理学以外にも、社会学、生理学、測定評価、バイオメカニクス、保健、統計学等々、様々な分野の方からの質問や意見をいただけた、とのことでした。これは、ポスター発表が体育心理学だけではなくたからではないかと思えます。同じ会場内で、書籍や機器の展示がされていたこともさることながら、同じ時間帯に他の領域（私が発表しているときはバイオメカニクスでした）のポスター発表があったことが、普段はなかなか交流を持つことのない、体育学以外の領域の先生方との出会いに結びついたのでと思います。このことは、発表者にとって、非常に大きな収穫になります。ポスター発表は、特に、発表を聞きに来てくださった先生方と直接、密度の濃いディスカッションをすることができますが、その上、体育心理学以外の先生方ともそのようなディスカッションをすることができる機会を得られるということ

体育学に関連する様々な領域の先生方が参加している体育学会ならではの、分野を越えた交流が

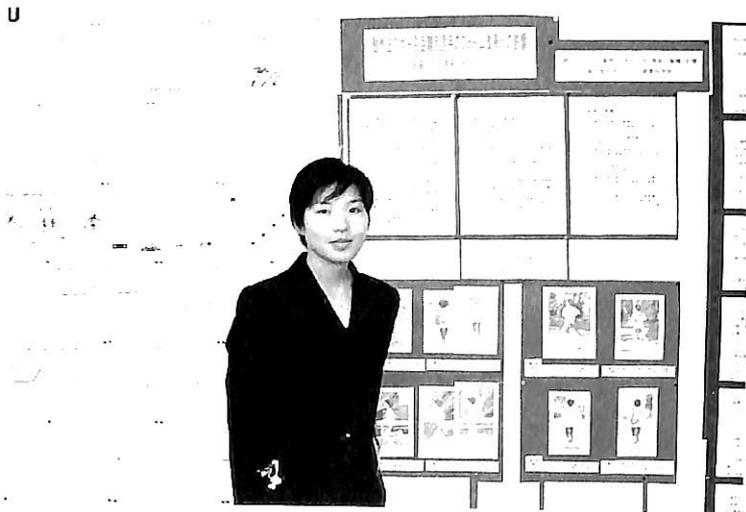
は、アプローチの違いこそあっても、同じ問題について取り組む方との意見交換ができ、新たな視点や考え方のヒントに結びつくと感じているからです。

今回のポスター発表は、体育心理学の口頭発表を時間が重なっている部分がありました。そのため、在席責任時間中にされている口頭発表を聞きに行くことができませんでした。このことは、非

常に残念でした。今後は、ポスター発表と口頭発表を別の日にする、午前と午後で分けるなど、時間が重ならないような工夫をしていただきたいと思います。発表数が多く、会場準備やスケジュール設定など、大会事務局のご苦勞は多々あると思いますが、この点についても考慮して頂けると、ますます盛会になるのではないかと思います。



ポスター発表の一コマ
(写真左から2番目が大場ゆかり氏)



鯉川 なつえ氏

<イブニング・シンポジウム報告>

10月7日：D5会場（18：10～19：30）

スポーツ社会心理学研究会 企画

「体育・スポーツ心理学における社会心理学的アプローチ」

伊藤 豊彦（島根大学）

今回のシンポジウムは、「研究会をもう少しオープンに」という専門分科会会員の声を背景に、日本体育学会第50回記念大会／体育・スポーツ関連学会連合大会の体育心理学専門分科会シンポジウムとして初めて企画・実施された。参加者が研究会メンバーのみの少人数に止まるのではないかと危惧されたが、予想外（？）の約30名が参集し、定刻通り開始した。シンポジウム（研究会）の開催に当たり、東京女子体育大学の阿江先生から、研究会を代表して、本研究会の設立の経緯や目的及び本イブニングシンポジウムを第2回目の研究会として開催したいとの説明が行われた後、以下の話題提供へと進んだ。

1. 「スポーツ選手とソーシャルサポート」

土屋裕睦（大阪体育大学）

2. 「心理的サポートの問題」

阿江美恵子（東京女子体育大学）

3. 「個人競技における凝集性」

林 智久（筑波大学大学院）

土屋先生のネットワーク分析の手法の紹介やミーティング場面での活用の可能性に対して、サポートの目的の明確化、誰がサポートを実施するのか、サポートに対する選手の依存性への配慮など様々な質疑応答が行われた。また、チームのサポートを実践

している立場から、阿江先生は、心理的サポートの専門家が不足していることや本来のサポートと研究との関係における問題点などを指摘された。これに対しては、フロアからの指摘にもあったように、いかにして指導者・選手との信頼関係を構築するのかやサポートチームを組んで対応することなどが今後の重要な問題点になっていくと思われる。

また、林先生の発表に対しては、集団の視点から個人競技を分析することの重要性や多様な視点からの分析の必要性が述べられるなど、活発な質問や意見交換が行われ、アツという間に予定の時間が経過した。

全体を通して、今回のシンポは、研究会をオープンにするという目的を持って開催されたことからいくつかの問題点も残された。まず、研究会のメンバーに対しては、各自5分程度の持ち時間で自己紹介をかねて興味関心のあることを報告するという予定であったが、時間不足から折角の資料も配布だけに止まった。一方、通常のシンポを期待して参加された方にとっては、テーマが曖昧で期待外れに終わったのではないかという点である。いずれも研究会事務局（筆者自身）に起因す

る問題であり、このようなシンポが今後継続されるとすれば十分な計画と準備が必要と反省している。ただ、始まったばかりの研究会の紹介と参加の呼び掛けという目的は、このような機会を与えていただいたことで十分達成されたものと感謝している。

なお、当研究会では、新潟大学の森先生のご尽力でメーリングリストを運用している（アドレス：sspm@birdie.ge.niigata-u.ac.jp）。すでに研究会の開催通知や研究上の議論などがメールを

通して行われているが、居ながらにして会員に質問したり、意見交換ができるなど、新しい研究会活動が日常的にできるものと期待している。

今後は、従来のミーティング形式の研究会開催と合わせて、多様な研究会活動を実施したいと考えているので、体育・スポーツの社会心理学的研究に関心のある方は、是非上記アドレス、もしくは伊藤（itotoyo@edu.shimane-u.ac.jp）までご連絡をお願いします。

10月7日：D7会場（18：10～19：30）

スポーツ動作法研究会 企画

「スポーツ動作法を体験する」

星野 公夫（順天堂大学）

本シンポジウムでは、前半30分で、星野が動作法の基本的な考え方を大急ぎで述べ、残りの60分を飯島（順天堂大学）の模範の下に、参加者がペアを作り、互いに指導・援助しあいながら、動作法で動作を遂行する際の実感を体験し合った。

参加者は、動作法関係者を除き35名あり、会場は満席であった。年齢層も幅広かったが、特に若手が多かった。また、心理関係者の他に、コーチ、選手等の実技関係者が予想以上に多く参加していた。

まず始めに、星野が「訓練場面で、動作課題解決の過程における動作体験の仕方をより良いものに変えることを通して、日常生活での体験の仕方を変える。つまり、心理的変容を図る」とする動作法の目的を説明した。また、人間は自分の動作への気づきが低いこと、人間の動作は不完全であ

ること等、動作法実施で得られた知見を述べたが、一見、話の内容が通常の常識と離れすぎているためか、参加者には理解しがたいと言うよりぴんと来ないようであった。

心理的な変容を一回で体験するのは難しいので、内容を動作の変容に焦点を絞った。参加者の1人に出てもらい、片脚で立ってもらった。上げた脚の側の肩を軽く押し下げると崩れてしまう。もっとしっかり立つよう指示しても同じである。そこで、筆者が相手の腰を持ち、重心が支持脚に乗るよう腰を移動させると、今度はびくともしない。本人は呆気にとられていた。次に自分でやらせるとできない。また筆者が手伝うとできる。この時、足の裏や腰回りの感じに注意するようにヒントを与えた。その後、自分でできた。

このデモンストレーションで、人間の動きは不完

全で、しかも気づきが低いことが納得できたようであった。また、動作は自分で自分の身体を操作するということも改めて納得できたようであった。場所が椅子席のため、動作法のごく一部しかできなかったのが、重要で、しかも、技能の獲得・向上に有益な課題を行った。

実地では、まず、肩を動かしながらリラックスする訓練を行った。うまくいったところでは、「おー」と言う声も挙がった。今までとは全く異なる肩の軽さを実感した驚きや戸惑いを感じたようである。その感じの後に、肩のリラックスによる快を

実感したと言う人が多かった。踏み締めの訓練では、腕を引き下ろされる力に対する抵抗力が訓練前後で全く異なることに驚いたようであった。最後の片脚立ちでは、参加者の多くが、重心移動のほんの僅かな違いで、安定感が全く異なることを実感したようであった。

何人かの選手・実技関係者から、動作法は実際に練習や試合で使えそうだと感想が述べられた。

10月8日：C2会場（18：10～19：30）

臨床スポーツ心理学研究会 企画

「身体からころへ」

土屋 裕睦（大阪体育大学）

1991年に発足し、毎年体育学会開催期間中に実施してまいりました「臨床スポーツ心理研究会」も、この50回記念大会で第9回を数えるようになりました。今回は下記の2つのセッションを企画いたしました。

1 実践紹介；

「ダウン症児への動作法を用いた水泳指導」

報告者；飯島 正博 先生（順天堂大学）

司会者；星野 公夫 先生（順天堂大学）

2 事例検討；

「長期にわたる競技者への相談事例」

報告者；鈴木 壯 先生（岐阜大学）

司会者；中込 四郎 先生（筑波大学）

以下世話人として気づいたことなどを交え、会の様子をご報告をしたいと思います。

1. 「大盛会、だけど…」；今回は76名以上の参加があり、これまでに類を見ないほどの盛会でした。この数字は、受付で名前を記入していただいた新規の方（46名）と既会員参加者（30名）の合計であり、実際は新規会員の手続きが完了できないまま研究会が開催されたため、これ以上の参加がありました。セッション1の後に世話人が参加者をカウントしただけでも82名の参加がありましたが、その後入室された方もいたようです。今回の研究会はイブニングシンポジウムとして開催し、プログラムに「身体からころへ」といった標題と企画主旨を掲載したことが関連し、多くの非会員の参加がありました。一方で開催時間が評議員会とバッティングしたため、参加希望の既会員の方にはご迷惑をおかけする結果となりました。

2. 「資料だけ欲しい」：非会員の方からも注目していただいたことに関連し、「興味はあるが他に予定があるので、資料だけ欲しい」といわれる方が多く、受付が混雑しました。資料配布のみはできないことをご了解いただくと同時に会の主旨をご理解いただくのに時間がかかり、新規会員の受け付け業務に支障が出ました。その結果、すべての参加者のお名前を把握できなかったことは世話人として反省材料となりました。「事例を語る」話題提供者にとってかなりの負担になったのではないかと思います。受付については万全を期したつもりでしたが、予想外の反響の大きさに戸惑い、また一般的な「情報」についての考え方と私たちが行なっている「事例を味わう、体験・研修としての研究会」との間でギャップのあることを強く感じました。

3. 臨床スポーツ心理への関心：前述の新規会員の手続きの中では「研究会で取り上げて欲しい事例」をお尋ねしましたが、ほとんどの方が「スポーツ選手への心理相談」を上げていました。研究会終了後、今回初めて参加された先生より「この研究会は一体、何だったんだろう」といった感想を頂きました。初めて動作法の実際を視聴し、心理相談事例の検討会に参加された方にとっては自然な感想かと思いました。今回はリスクを覚悟したうえでイブニングシンポジウムとして公開しましたが、この意味でメリットもあったと考えています。この領域への関心が、教条的・一義的に広まるのではなく、いろんな形で発展することを願っています。幸い今回も話題提供者・司会者・フロアーに恵まれた形になり、この領域へ関心をもって下さる体育関係者には本研究会の一端を体

験していただけたのではないかと思います。しかしながら、今回のような時間枠では到底十分な検討・ディスカッションを行なうことができず、今後も学会時に本研究会を開催するなら、時間枠の確保が大きな課題になると考えられます。なお、他に「スポーツセラピーの事例・動作法の事例」「コーチングの事例・トレーナーの事例・体育授業の事例」についても取り上げて欲しいという希望が多く出されていました。また、研究会終了後には、発足当初より本研究会を支えて下さっている太田鐵男先生の乾杯により懇親会を行ない、情報交換…というより多めに飲んで語り合いました。

以上、事務局として反省も含め、思いつくまま研究会の報告を致しました。最後になりましたが、今回は特に、学会事務局である東京大学および分科会事務局のご協力なしでは開催できませんでした。ご関係の先生方にこの場を借りて感謝いたします。

10月10日：D4会場（18：10～19：30）

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 企画
「競技力向上のメンタルトレーニング」

高妻 容一（近畿大学）

このシンポジウムは、研究と現場のギャップを埋めることを目的に、現場のコーチたちがどのようにして研究を応用したり活用しているのかを紹介する形式だった。

最初に、国際スポーツ心理学会から派生した国際メンタルトレーニング学会や北米スポーツ心理学会から派生した国際応用スポーツ心理学会を中心とした世界におけるメンタルトレーニングの動向が紹介された。特に、従来の研究中心の学会から現場での応用を目的とした世界の動向とそれに立ち遅れた日本の現状の説明があった。また現場ではスポーツ心理学の背景のない日本式メンタルトレーニングが現場のコーチや選手を混乱させている現状報告もあった。

次に、現場での応用や質の向上を目的に、1994年からスタートした「メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会」の活動報告がされた。引き続き、現場のコーチがビデオを使用してメンタルトレーニングの実践報告がされた。

1. ユニバーシアードで金メダルを獲得した日本代表サッカーチームのビデオと監督からの実践例報告。

2. 関東2部5位の青山学院大学サッカー部のメンタルトレーニング実施3年間の結果（リーグ戦優勝・総理大臣杯準優勝）と心理テストによるデータとその効果が部長兼コーチから報告された。

3. プロ野球広島の田中投手を育てた大商学園高

校野球部監督がプロのマウンドで心理的スキルを活用して活躍（完投）している田中投手のビデオを使いプロの試合での実践例報告。

4. 春の甲子園大会に出場した高田高校のメンタルトレーニングを応用した甲子園練習（心理的準備やイメージノックなど）のビデオを見せながらの実践例報告。

5. メンタルトレーニングを導入して4年目に大阪府・近畿大会で優勝した大阪産業大学付属高校野球部の監督から実践例報告。

6. 50連敗後にメンタルトレーニングを導入し、その年の5冠（5つの大会優勝）を達成した近畿大学に勝った京都大学野球部の実践例がコーチから報告された。

7. 高校の体育科の授業でメンタルトレーニングを実施している汎愛高校の例を野球部の監督が報告した。

8. (株)ミズノの社員が企業から見た研究と応用のギャップや動向などの報告があった。

質疑応答において会場からの質問として、「メンタルトレーニングを実践してマイナス面はないのか？」があり、現場のコーチたちから「ほとんどない」との応答があった。またある研究者からは、「現場では、ここまで応用や実践をしているとは思わなかった」などのコメントがあった。シンポジウムは、予定時間を20分オーバーするほど盛り上がり、参加者は68名ほどあり、その後の懇親会でも12名が参加し、多くの情報交換がされた。

<学会傍聴記>

日本体育学会第50会記念大会に参加して

荒井 弘和（早稲田大学大学院）

森におおわれた山々ではもう
身ぶるいさせる茶色がきざしている。

友よ、秋は近い。

秋は、もう森のおちで待ち伏せながら、ながし目を
送っている。

— ヘッセ

残暑が厳しかったこともあり、ようやく訪れた秋の涼風は身体だけでなく心にも安らぎを与えてくれる。緑豊かな駒場のキャンパスでは、ヘッセの記述そのままの光景がわれわれを迎えてくれた。平成11年度の日本体育学会は、第50回の記念大会ということもあり、体育の日を挟んで5日間、早朝から日が暮れた後まで、研究発表が活発に行なわれていた。私にとって、日本体育学会で発表をすることは初めての経験であり、どのような方々がどんな意見をたずさえて自分のポスターを見に来てくれるのか、大変楽しみであった。そんな本大会の体育心理学ポスター発表会場で、若輩ながら私が感じたことをここで綴ってみようと思う。

幅広い分野の研究者が発表会場に集まることが、本学会の大きな特徴である。たとえば、私のポスター発表には、コーチ学、運動生理学や体育教育学の方々が足を運んでくれた。おかげで、普段とは異なった視点から自分の研究を見ることができるようになり、私にとって大きな収穫となった。もちろん、私も可能なかぎり彼らの発表に足を運び、分野

を越えて交流していくことを約束した。このような交流が可能になるよう、異なる分野の研究者と議論ができるようなポスター発表を行うことが重要であると思われた。異なる分野の研究者が理解しやすいようなポスターを作るだけでなく、研究者自身が、「これは違う分野の研究だから」と、最初からふるいに掛けることなく、自らの興味に拠って研究発表に足を運ぶことが必要であろう。分野を超越した議論が、研究者自身はもちろん、本学会の発展にもつながることは疑いない。

近年、「健康増進の手段」としての体育・スポーツという視点の研究が増加しており、本大会でもその傾向はますます顕著であったと思われる。その一方で、アスリートを対象とした「競技志向」の研究も根強い。多種の競技にわたってデータを収集している研究、一つの競技のみを深く考察した研究など、それぞれの切り口から興味深い発表がいくつもあった。この二つの視点—「健康スポーツ」と「競技スポーツ」—は体育心理学を二分しており、また体育心理学をより幅広く魅力あるものになっている。実際、健康スポーツを研究している私も競技スポーツの研究発表にたびたび足を運び、興味深い知見に触れることができた。二つのうちどちらにも偏っていないことが、本学会の興味深いところであり、また、そうであるべきだとも感じた。

今回、私が最も嬉しさを覚えたことは、発表会場のあちこちで異なる視点を持った研究者たちが活発

に議論し、交流を深めていたことである。体育心理学を支える二つの視点を持った研究者たちが互いに交わり、互いに刺激しているかぎり、体育心理学の将来は明るいと強く確信して、会場を後にした。

(文末ではありますが、事務局の皆様ならびに本大会のスタッフの皆様へ深く感謝いたします。ありがとうございました。)

日本体育学会第50回記念大会に参加して

田島 誠 (広島大学大学院生物圏科学研究科)

一般発表やシンポジウムについての詳細な内容や感想等は、座長や司会をなされた先生方が報告されていますので、ここでは本学会の参加者として感じたこと・思ったことをそのまま書かせて頂きました。

体育学会初日10月7日9:00からの発表のため、前日に東京入りした私が予約したホテルに無事たどり着いたのは、日付が変わるほんの30分前であった。明日(今日?)の発表に備えて、早めにベッドに潜り込んだ。今までの経験から、発表前日はなかなか眠りにつきにくかったのだが、今回はビールの力を借りたため、すぐに意識が薄れていくのが分かった…。

翌日、広島から出てきた私にとっては貴重な体験となった朝の通勤ラッシュに揉まれながら、体育学会の会場がある駒場東大前駅に到着した。駅の正面に大学があるという便利さに羨みながら、駒場キャンパスの中に入っていくと、銀杏の何とも言えない香に包まれ、その瞬間に先程感じた羨ましさは私の意識の中からすっかり掻き消えていた。

キャンパス内の地図を便りに発表会場へと足早に急ぎ、いよいよ発表時間となった。適度な緊張感を味わいながら、改めて教室内を見渡すと、例年以上

に人が入っていることが分かり、多少の嬉しさを感じながら発表を始めることができた。しかし、発表終了後、知り合いの先生に朝早くから聴きに来て頂いた御礼を述べると、「他に行くところがなかったからね。」といういべもない返事が返ってきたのを私は今でも覚えている(冗談だったとは思っているが…)。

今年の体育学会は50回という節目の記念大会ということもあり、体育心理学専門分科会も例年以上の様々な企画が用意されていた。一般発表には、口頭発表とポスター発表があり、専門分科会企画の特別講演やその他のシンポジウムも大変充実していた。10月7日は、自分の発表が終わった後、他の口頭発表を興味深く聴き、次にポスター発表の会場へと足を向けた。会場となった体育館の一角には、様々に彩られたポスターが所狭しと張り出され、その前では何人かの先生方が熱心に演者と討論しており、その周りを大勢の人たちが取り囲んで聴いていた。かくいう私もその他大勢の中の一人だったわけであるが、質問の一つもできなかったことが悔やまれてならない。

7日の午後から8日にかけては、シンポジウム等を中心に聴いて回ったが、特に個人的に印象深かつ

たのは特別講演の「からだの自由と不自由」であった。お恥ずかしい話であるが、このテーマを見てはじめは身体障害についての講演かと勘違いしたのだが、その内容はエネルギー消費効率から捉えた歩行パターンの形成についてであり、自分の研究とは多少なりとも関係していたため、大変興味深く聴くことができた（帰宅した翌日に、長崎先生の「からだの自由と不自由」という本を購入したのは言うまでもない）。その他、流行のメンタル・トレーニングや社会心理学的な観点からの健康スポーツについて

など、実際の現場において体育心理学が担うべき役割を改めて考えさせられた。

帰路の途中、渋谷の駅で15cmぐらいの厚底ブーツを履いた女性を数人見かけた。彼女たちの歩行パターンはとても効率的とはいえず、危なっかしいものであった。長崎先生の効率による歩行パターンの同定も、彼女たちのファッションにかける思いまでは計算に入れていなかったなあと感じながら、その綺麗な脚をしばらく目で追っていたのは私だけではなかったはずである。

日本体育学会第50会記念大会に参加して

岡 浩一郎 (早稲田大学人間科学部)

10月7日、5日間にわたる日本体育学会の初日である。いい天気だなあと目覚めて、心がウキウキしていることに気がついた。なぜなら、東京大学駒場学舎までの道のりは私にとって小さな旅行だからである。普段は経験しない満員電車に乗り、45分で池袋に、そして山手線に乗り換えて渋谷までさらに揺られること20分。最後に井の頭線に乗り、流れていく景色を眺めながら揺られること約5分、やっと目的地に到着した。渋谷のすぐ近くにこんなに緑があったのかと感心するほど、駒場学舎は緑が多く、さながら都会の中の小さな森のようだった。しばし緑の木々が持つヒーリング効果を楽しみながら、校舎の中へと進んだ。

本大会は、50回の記念大会で多くのイベントが開催され、学際的な研究も数多く、大変充実したものであったと思われる。このような大きな学会に

参加する楽しみは、遠方でがんばっている仲間と逢えること、自分の視野を広げるような刺激を受けられる場であるということ、そしてなにより楽しく飲めることである。私自身は最後の楽しみを一番重視しているような気がするが……。また、本大会では、自分がシンポジウムで発表を行うということもあって、その準備や打ち合わせには多くの時間を割いた。そんな昨日までの生活を思い出しながら、“うまくいくといいな”と、夕方のシンポジウムに向けて心地よい緊張感を覚えていた。

本大会の目的は『体育学・スポーツ科学の領域専門化と総合化の両立をめざして』であった。この『専門化と総合化』ということは、一見相反することであるように思われるが、学際的な研究や実験を行う上では非常に大切なことであると私は思う。なぜなら、自分の専門分野を極めるのは大切なこ

とであるが、視野が狭くなってしまっは新しいアイデアなどが浮かんでこないと思うからだ。そういった意味でも、本大会は生理学系、心理学系、スポーツ体育系、方法学系まで多くの分野のスペシャリストが揃っており、研究をマクロ、およびミクロな視点でとらえるよい機会であったと思う。

他の領域の共催シンポジウムにも出席したが、子どもの学習指導要領の検討から高齢者の健康・スポーツまで幅広く、様々な分野の出席者からたくさんの意見がでて、とても刺激のかつ柔軟なシンポジウムであった。私達の主催したシンポジウムでも、多くの先生方から御意見をいただき、同じ領域で研

究をしている先生、または他領域で研究をしている先生方の有意義な情報交換の場になったと思う。

3日間は長いようであつという間に終わってしまった。しかし、小旅行も3往復もしたので良い気分転換になった。第50回であった本大会は、私だけでなく多くの研究を志す人たちに刺激を与えたのではないかと思った。今日のこの充実感を来年の体育学会でも感じられるように、明日から普段の生活に戻ろう。そして、ここで感じたものや発見したことを今後の研究活動に生かしたいと思った。



学会会場の一コマ
(ポスター発表会場の体育館にて)

IV. 日本体育学会第51回大会案内

1. 日本体育学会第51回大会（奈良女子大学）の内容案内

1) 総会

日時：10月9日（日）9：30～10：30

会場：記念館

2) キーノートレクチャー

日時：10月9日（日）10：30～12：00

会場：記念館

テーマ：「運動制御の階層秩序」

司 会：関矢 寛史（広島大学総合科学部）

演 者：調枝 孝治（広島大学総合科学部）

3) 一般口頭発表・ポスター発表

日時：10月7-8日

会場：E108（口頭）・体育館（ポスター）

運動制御の階層秩序

調枝孝治 (広島大学総合科学部)

運動制御、階層秩序、相補性、秩序パラメータ、ゆらぎ

1) 運動の多様性と複雑性の次元

運動スキルの学習は、人間の運動能力の多様性 (diversity) と複雑性 (complexity) という二つの次元で発展的な展開がみられる。運動学習で習得される多様性とは、運動要素の数の増大を意味する。それに対して複雑性とは、運動要素間の相互作用の数の増大を意味する。そして、前者は運動能力の量的増大に、後者は運動能力の質的増大に関心が向けられる。

通常、体育やスポーツの分野で運動能力の向上と呼ばれている内容は、運動の多様性と複雑性の両次元についてのパフォーマンスの向上を指している。しかし、過去の運動学習や制御の研究は、どちらかといえば、運動の多様性についての研究や教育が支配的で、運動の複雑性に関する体系的な研究はこれからというのが本音である。

本講義では、運動の複雑性の研究上で使用される階層性 (hierarchy) の概念を主軸にして、運動の質的レベルが向上する遷移ルートを運動制御の階層秩序という観点から紹介する。

2) 複雑系の階層性

階層性が問題になるのは、複雑なシステムの場合である。階層性という言葉は、ギリシャ語の聖職上の序列を表す言葉からきており、歴史的には天使の階層、あるいは教会組織の権限階層を表す言葉である。

いま身近な例として人間の階層性を示すと、細胞、組織、器官、器官系、有機体、家族、村、町、市、国、世界、?とその階層を上がって (より複雑に) いくと同様に、細胞、分子、原子、素粒子、?と下に向かって (より単純に) もその末端は開いたままに各階層が推移していく。そのため、その最終的構成要素はついにみつからないことを意味している。そして、この階層性は、順次複雑さを増すような形で、制御の網目が一枚の上に一枚と重なり構造となっている系である。その様な系では、全体とか部分とかいう言葉は相対的なものとなる。

人間の運動行動の階層構造としては、反射運動、基本運動、協応運動、熟練運動、創造・表現運動という階層がある。そして、このような階層構造を生成・維持させている機構としては、「固定された規則 (下位レベル) と柔軟な戦略 (上位レベル) (Keostler, 1969)」や「構造の保存と解体 (Lorenz, 1972)」が提出されている。これは、階層構造の下位レベルはより上位レベルに対して制約が大きい、上位レベルはより下位レベルより自由度が大

きいことを示している。さらに、不変構造と可変構造というように二つの対立する機能のダイナミクスは、自然界のあらゆる階層秩序にみられる普遍的なものである。つまり、階層構造は、レベル間の相互干渉作用の制御過程によって特徴づけられるとあってよいのだろう。

とはいうものの、階層理論は未発達で問題も多い。何が各レベルを生成し、何がそれらを分離し、また何がそれらを結びつけるのか。さらに、異なるレベルの複雑性を記述するには、異なる記述言語が必要ではないのか。これらの諸問題に対して、Feynman が言うように多くの研究者は階層間の関連を見抜くために、上へも下へも、どちらの方向にも関連を求めて努力しているのである。

3) 運動制御の階層性

本講義で取りあげる階層レベルは、運動の学習や制御のレベルでの階層構造である。知覚-運動スキルの学習段階として、最もポピュラーな階層モデルは、Fitts and Posner (1967) が提出した認知段階、固定段階、自動段階である。この階層モデルは、ある特定の運動課題の初期段階から熟練段階までの質的変化を説明するものである。さらに複雑な運動スキルの学習過程のメカニズムを説明する階層モデルとしては、次のような運動制御の階層モデルがある。

それらは、フィードバック制御、適応制御、さらに自己組織制御という階層モデルである。ここでは、これらの制御レベルの特徴を簡単に示しておく。フィードバック制御レベルは、誤差検出と誤差修正による機能安定化が主要な役割である。また、過剰学習による冗長度の増大がフィードフォワード制御への移行を生じさせる。この制御レベルは、先述の Fitts らの運動スキルの学習段階モデルに相当する制御レベルである。適応制御レベルは、構造を規定するパラメータの変化に対する調整が主要な役割である。フィードバック制御レベルでの既習の能力を新しい変化事態に適用する柔軟性が求められる。さらに予期以上の構造変化に対処するための自己組織制御レベルがある。自己組織制御のレベルでは、構造の変化が主題となる。つまり、既存の運動のやり方そのものを変更し新しい運動パターンの創発に関係した制御レベルである。

以上のような運動制御の各階層レベルの特質を相互に関係づけながら、古い重要な問題を新しい観点から捉えてみることにする。

V. 事務局報告

日時：平成11年10月8日（金）9：30—10：30

会場：東京大学駒場 E-1

体育心理学専門分科会総会次第

1. 開会の辞

2. 議長の選出

3. 報告

- 1) 平成10年度事業活動報告について
- 2) 日本体育学会50回大会について
- 3) その他

4. 審議

- 1) 平成11年度決算及び平成12年度予算案について（資料1・2）

2) 平成12年度の事業計画について

- ① 日本体育学会第51回大会について
一般研究発表（口頭・ポスター）
シンポジウム
キーノート・レクチャー

- ② 体育心理学専門分科会「会報」第12号（通巻40号）の発行について

- ③ その他

3) 事務局の交替について

4) その他

5. 閉会の辞

1. 平成11年度事業報告

1) 日本体育学会体育心理学専門分科会関係

(1) 特別講演

日時：10月8日（火）10：30～12：00

会場：東京大学教養学部駒場キャンパス（E-1）

テーマ：からだの自由と不自由

司会 荒木雅信（大阪体育大学）

演者 長崎 浩（東北文化学園大学）

(2) イブニングシンポジウム企画

日時：10/7-10, 各日, 18：10～19：30. ()内は会場名

10月7日：「スポーツ動作法（D7）」・「スポーツ社会心理学研究会」（D5）

10月8日：「臨床スポーツ心理研究会」（C2）

10月10日：「メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会」（D4）

(3) 一般発表

口頭発表およびポスター発表：平成11年10月7日および8日.

発表数：平成11年度54題（口頭発表26題；ポスター発表28題）

（備考：平成6年度55題；平成7年度50題；平成8年度47題；平成9年度52題；平成10年度46題）.

(4) 総会

日時：10月8日（火）9：30～10：30

会場：東京大学教養学部駒場キャンパス（E-1）

2) 体育心理学専門分科会会報の発行

会報第11号（通巻第39号）を8月15日付で発行した。全会員671名および他専門分科会事務局（12部）を郵送した。

3) その他の事務局業務報告

事務局業務として、次の事項を遂行した。

- (1) 第50回日本体育学会専門分科会連絡会議出席。
- (2) 特別講演講師への依頼。
- (3) 専門分科会連絡会議および支部長・専門分科会世話役合同会議への出席。
- (4) 日本体育学会一般発表プログラムの作成、および座長の推薦。
- (5) 発表数54題（口頭発表26題；ポスター発表28題）のプログラム作成と座長の推薦を当番校に通知した（6/2）。
- (6) 体育心理学専門分科会会報の原稿依頼，編集，および送付（8/15）。
- (7) 名誉会員の推薦。飯田穎男・松本壽吉両氏を推薦した（3/15）。
- (8) 日本体育学会の法人化に関して本分科会評議員に対して関係資料を送付し，その賛否・理由について意見調査を行った（4/1）。この結果は，既に昨年の本会報（第11号，p.80）で報告している。その結果，13名から返答があり，賛成12，保留1という意見が出された。
- (9) 第50回記念大会イブニング・シンポジウムにおける研究会開催の希望調査（2/24）。
- (10) 「体育学研究」次期編集委員候補者の推薦に対する回答（2/12）。
- (11) 日本体育大学図書館から「曲り角」「日本体育学会体育心理学専門分科会報」（第1-9号）の寄贈依頼があり，送付した（10/30）。

2. 第50回記念大会総会関係（議題）

1) 平成12年度の事業計画について

- (1) 日本体育学会第51回大会関係
- (2) 体育心理学専門分科会会報第12号（通巻40号）の発行
- (3) 次期分科会事務局交代について（名古屋大学を推薦する旨を提案）
- (4) 第51回大会のキーノートレクチャー等の運営は事務局一任する旨，了承

2) 平成11年度決算および平成12年度予算案について（別紙資料参照のこと）

3) その他

3. 速報

(1) 日本体育学会体育心理学専門分科会選出の評議員選挙（3月14日通知，4月14日開票および選出），および会長の選出（4/26通知，5/18開票）。選挙の結果（投票率15.8%；会員数671名；回答数106名），平成13・14年度における体育心理学専門分科会選出の評議員委員は下記の先生方に決定し，学会本部に提出した。今回選出の評議員22名には，本分科会運営委員も兼任していただく。この結果評議員22名が選出され，会則第10条に基づき評議員の互選により会長1名（徳永幹雄氏）が選出された。

1. 阿江 美恵子	7. 猪俣 公宏	13. 中込 四郎	19. 和田 尚
2. 荒木 雅信	8. 石井 源信	14. 岡沢 祥訓	20. 山本 勝昭
3. 調枝 孝治	9. 伊藤 政展	15. 佐久間 春夫	21. 山本 裕二
4. 藤田 厚	10. 伊藤 豊彦	16. 杉原 隆	22. 吉田 茂
5. 船越 正康	11. 近藤 充夫	17. 竹中 晃二	(ABC順，敬称略)
6. 橋本 公雄	12. 工藤 孝幾	18. 徳永 幹雄	

(2) 次期専門分科会事務局（平成13年度—16年度：平成12年学会終了時から平成16年学会終了時の4年間）の交代について，現事務局から西田 保・山本裕二・竹之内隆志各先生（名古屋大学総合保健体育科学センター）に打診し，了承をえられた。引き続き，評議員に賛否を求めたところ（5/17締切，5/18開票），賛成意見多数（18/22）であった。本件については，第51回大会（奈良女子大学）総会において議題として検討される。

(3) 日本体育学会奨励賞に本専門分科会会員の土屋裕睦氏（大阪体育大学）が授与された。これは，「体育学研究」（1998，45巻，p.133）誌上の「総会議事要録」で報告されている。

奨励賞受賞論文：大学新入部員をめぐるソーシャル・サポートの縦断的検討：バーナウト抑制に寄与するソーシャル・サポートの活用法

体育学研究. 2000, 42 : 349-362.

4. 平成11年度決算および平成12年度予算案について

【資料1】

平成11年度決算報告（自 平成10年度総会 至 平成11年度総会）

○収支決算書

款	予算案	決算	差額
収入の部			
当期収入合計 (A)	779,001	766,384	12,617 ▽
前期繰越収支差額	917,852	917,852	0
収入合計 (B)	1,696,853	1,684,236	12,617 ▽
支出の部			
当期支出合計 (C)	1,100,000	801,387	298,613
次期繰越収支差額 (B)-(C)	596,853	882,849	285,996 △

▽減収 △超過

○収入の部

款	予算案	決算	差額	説明
・前年度繰越金	917,852	917,852	0	
・年会費	650,000	636,000	14,000	1000円×636名
・シンポジストより返金	0	0	0	
・郵便貯金（利息）	1	384	383 △	
・体育学会専門分科会補助金	129,000	130,000	1,000 △	
○収入合計 (B)	1,696,853	1,684,236	12,617	

△増収

○支出の部

款	項目	予算案	決算	差額	説明
・分科会会報関連費用	小計	450,000	446,801	3,199	
	印刷費		252,000		750部印刷
	郵送料		157,390		654部発送
	会報作成補助費		30,000		
・シンポジウム等関連経費	小計	250,000	231,500	18,500	
	謝礼（特別寄稿）		31,500		1.05万×3名
	謝礼（講師）		130,000		講演・お車・お食事
	謝礼（傍聴記会報寄稿者）		70,000		0.5万×14名
・ポスター発表負担金		100,000	0	100,000	今年度負担なし
・事務局事務費	小計	150,000	93,466	56,534	
	文具、コピー、封筒印刷費等		13,466		
	発送業務・資料整理等		80,000		
・通信費	会員・評議員連絡費	150,000	29,620	120,380	
・当期支出合計 (C)		1,100,000	801,387	298,613	
・予備費 (B)-(C)		596,853	882,849	285,996 △	収入一支出
○支出合計		1,696,853	1,684,236	12,617	

△超過

【資料2】

平成12年度予算案（自 平成11年度総会 至 平成12年度総会）

○収入の部

款		前年度度決算	予算案	差額
・前年度繰越金		917,852	882,849	35,003
・年度会費		636,000	640,000 △	4,000
・郵便貯金（利息）		384	1	383
・体育学会専門分科会補助金		130,000	130,000	0
・当期収入合計(A)		766,384	770,001 △	3,617
○収入合計(B)		1,684,236	1,652,850	31,386

△増収

○支出の部

款	項目	前年度度決算	予算案	差額
・分科会会報関連費用	印刷費、郵送料、会報作成補助費等	446,801	450,000	3,199
・シンポジウム等関連経費	小計 謝礼（学会講師、司会、会報原稿協力者等） 専門分科会懇親会補助 シンポジウム打ち合わせ補助等	231,500	250,000	18,500
・ポスター発表負担金		0	100,000	100,000
・事務局事務費	文具、印刷費、発送業務・資料整理費等	93,466	150,000	56,534
・通信費	会員・評議員連絡費等	29,620	150,000	120,380
・当期支出合計(C)		801,387	1,100,000	298,613
・予備費(B)-(C)		882,849	552,850	320,999
○支出合計		1,684,236	1,652,850	31,386

編集後記

会報第12号（通巻40号）を会員の皆さまにお送り致します。

本号の「はじめ」にも触れましたように、私どもが責任担当として発刊する最後の会報となりました。年に1度の発刊でありましたので、最新の情報を盛り込むというよりも、もっぱら各年度の学会等での分科会関連の活動記録を残すことを主な目的として編集してまいりました。そのような中であって、特別寄稿としていただいた原稿は、各号の会報を興味深いものにしていただくことができました。この場を借りて、重ねてお礼申し上げます。

今後も本会報の中で多くの会員の「顔」が見えるよう積極的な参加を期待いたしております。それでは次期事務局にバトンタッチいたします。「ありがとうございました」。

平成12年 8月

日本体育学会体育心理学専門分科会会報 第12号（通巻40号）

発行	平成12年8月21日 発行（非売品）
発行責任者	中込四郎（代表）
発行所	日本体育学会体育心理学専門分科会事務局 〒305-8574 つくば市天王台1-1-1 筑波大学体育科学系 中込研究室内 TEL&FAX：0298-53-2686
印刷	前田印刷株式会社 筑波支店 〒305-0033 つくば市東新井14-3 TEL：0298-51-6911
